Osaka University Knowledge Archive

Title	青年文化の問題 : 青年社会学のための序説
Author(s)	二関, 隆美
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1975, 1, p. 187-249
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12275
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

青年文化の問題

——青年社会学のための序説——

二　関　隆　美

目　次

第1節　青年問題への視角 ……189
第2節　青年文化論の台頭と課題 ……192
第3節　青年文化の概念をめぐって ……198
第4節　年令段階区分の問題 ……204
第5節　社会的所産としての青年期 ……209
第6節　青年役割文化 ……218
第7節　青年局在文化 ……228
第8節　青年逸脱文化 ……235

青年文化の問題

——青年社会学のための序説——

第1節　青年問題への視角

青年期は個人の発達段階・人生周期における一時期であり，子ども期とおとな期とにはさまれた移行の時期とされている。それはまた，二重三重の意味で社会的存在である。第一にすべての人間発達の論理に支配されることとして，青年期もまた個体の内的・生物的因子とともに，社会・文化的環境因子による形成物であり，第二に青年は社会の総成員を分化させるばあいの年令カテゴリー・年令階層のひとつとして社会的種類に該当し，その意味で統計的な社会的部分を構成する。さらに第三に，それは単なる分類上のカテゴリーである以上に文化的に産出された地位・役割であり，具体的な青年像や青年特性には，社会的に規定された役割期待への反応としての側面がある。第四に青年は総体社会のなかの下位集団として具体的な青年集団にまとまっていることがしばしばである。

ハインリッヒ・シュルツ (Heinrich Schurz) は1902年の先駆的著作「年令階級と男性結社」(Altersklassen und Männerbünde)[1]において，民族学的な資料にもとずき，「子ども・青年・おとな」という年令階層カテゴリーや年令集団は，あらゆる未開社会においてすら普遍的であり，社会進化の過程においてかならず経由する現象であると主張した。今日までの人類学的実証研究によって，シュルツの仮説の妥当性はうすらぎ，ことに「年令集団」の普遍的存在については否定的資料もすくなくないのであるが[2]，社会的種類としての「年令階層カテゴリー」については，未開社会の少数例外をのぞき，人類の社会がなにほどかの文化蓄積と社会統制装置をもつようになった段階では，普遍的にちかいといってよいし，したがって青年という社会的存在の認知の成立もそうであるとかんがえてよいであろう。

さて，視野を一挙に近代社会にひきもどすと，青年期の研究は，ホール (S. Hall)[3]をはじめ，主として現代の先進産業社会における青年心理学において開拓され，今世紀以来の記述

1) Schurz, Heinrich : Altersklassen und Männerbünde, Georg Reimer, 1902, S.V, S. 52, SS. 84～86, SS. 125～126
2) 吉田禎吾：青年集団の文化人類学的考察，青年心理学講座第4巻「社会と職業生活」，金子書房，1955, p.188.
3) Hall, G. Stanley : Adolescence, D. Appleton & Co., 1904.

と説明の蓄積にはおびただしいものがあり，われわれの青年理解はそれらにおうところ大である。ところで，およそ人間的・社会的な事象についてわれわれの認識が選択的に焦点づけられ，あるいはより精密な科学的探究へと発展するばあいには，認識者自体の存在のありかたをふくめた人間的・社会的関心が発生するからであって，なんらかの問題的状況に対する認識意図とか前科学的動機がもたれるからである。それならば，今世紀初頭以来の青年心理学的研究をふくめた青年への関心は，どのような状況を背景とし，どのような認識意図によるものであろうか。社会思想史あるいは社会意識論のたちばからみて，以下の三点があげられるとおもう。

それは根本的には，近代社会における社会変動から生じた，青年への特殊な課題・必要・要求からうまれたものである。第一に，近代国家と近代産業という巨大な社会的勢力が，前近代社会とは比較にならない規模と程度において，青年エネルギーを動員し，利用しようとしたことがあげられる。体制支配の側の青年への需要と期待ということができる。近代産業は，政治・経済体制のいかんにかかわりなく，技術の発展と組織の拡大の過程において，良質で大量の若年労働力を導入しつづける必要があった。また，近代産業を基礎的な構成要素とする近代国家は，自己の文化的水準と社会秩序の維持・発展を，世代交代過程における新世代の社会化に託し，特に成人地位に接近しつつある青年世代への関心にはなみなみならぬものがある。要するに，近代社会において，青年は教育の対象として意識され，そのようなイメージは全体制的な規模において確立する。「青年よ，野心をもて」，「青年よ，未来はなんじのものだ」，「青年よ，力をたくわえよ」など，おおくの鼓舞と期待のよびかけは，近代社会における進路選択の幅のひろさや自由とか，急性社会変動下における変革の可能性や未来の信仰を背景としたものであろうが，同時にそこには国家や産業を骨格とした体制が，自己の保持拡大を青年に期待した願望の意味あいがないとはいえない。

第二に青年は，消極的には福祉の対象として，積極的には人権の主体者としてみとめられたことがあげられる。それらの理念が形成されてゆく具体的・歴史的な契機は，近代社会におけるいわゆる青少年問題の発生である。それは個体発生論的意味での青年期における生物・心理的特性だけに帰しえないのであって，その発生は社会因により，近代社会の体内から産出され，近代化の必然的随伴現象である。周知のように，イギリスにおける資本主義的工場制生産の開始，前近代的農村共同体から流入しきたった都市プロレタリアートの成立にともなう若年労働の非惨・不健康・道徳的退廃がその発端であった。[4] 以来，青少年の不幸や困難などの社会病理は質量ともに明確に顕在化し，増大した結果，社会はその防衛と自己の体質の改善のためにさまざまの福祉的対策をかんがえだし，実施するようになった。青少年福

4) 二関隆美：青少年問題，教育社会学辞典，東洋館出版社，1962 pp. 652—654.

祉の思想と事業が盾の半面における消極面とするならば，他方では，より広範な規模で近代社会に台頭・拡大する人権思想は，教育・労働その他社会生活における青年の価値を積極的にたかめ，承認する気運を生じた。青年は成人の従属者・徒弟・見習いとしてのみ，社会の片隅に遇せられるべきでなく，それ自体が価値ある存在として公認されるべきであるということが，すくなくとも理念レベルで市民権を獲得するようになった。青年も人権の主体者であるとするならば，社会的生存における価値が平等に承認されるだけでなく，さらに一歩をすすめ，その意識・行動・発言・要求には社会の変革力たる価値と可能性が承認され，期待されるべきであるという思想に発展する。これは後述するように（第8節参照），現代における青年期特性や青年文化のある種のものを順機能的に評価するばあいの根拠につながっている。

第三はやはり，いわゆる青少年問題の一種に属する現象であって，近代社会，特に二十世紀の特徴のひとつに「若者の世紀」ということがいわれている。あるいは「若者が出現した世紀」ともされているが，勿論その意味は，この時代になって青年がはじめて存在するようになったということではなく，社会にとり，成人にとり，青年が違和をおぼえさせる存在として姿をあらわしたということであろう[5]。その違和とは，単なる世代間の相違とか，青年の特性一般に解消できるものではない。もともと青年世代はなんらかの特性（以下において青年性と呼称することがある）において成人世代と相違するのであって，だからこそ通史・通文化的にほとんどの社会が青年という時期・地位のカテゴリーを設定してきたのであった。ただ，伝統主義的な安定した社会にあっては，青年が成人世代と相違する特性は，総体社会や成人にとって整合性のある相違であったのであるが（第6節「青年役割文化」参照），近代社会にあらわれた青年の特性のある種のものには，成人が支配してきた価値・役割体系からはみだした逸脱や不整合の相違がみとめられるのであった。かような青年の逸脱性によって，あらためて青年存在が発見され，世代関係の不調が実感される。つまり，青年は成人に対して「こまった連中」という狼狽，「手がつけられない」という困惑，「理解しがたい」という慨嘆をおこさせ，これらの青年性の新型が社会組織に不適合であり，社会体制の統合と安定をおびやかすように成人の眼に映ずるところから，成人社会は何らかの対策にのりださざるをえなくなり，福祉・教育・刑罰などの施策によって調整をこころみようとする。社会は，したがって成人世代は，自己のつくった路線を踏襲する後継者を希望するものであるけれども，既存の路線の延長における青年対策が成功するかどうかには疑問があり，別な検討を要するであろう。むしろ，現代におけるかなりの規模（ただし，現代青年のうち多数派をしめるまでにはいたらず，つねに少数派なのである）の青年にみられる逸脱的な新型の出現

5）二関隆美：青少年問題，教育経営事典，第4巻，帝国地方行政学会，1974, pp. 110～114

は，青年史上未曽有のことのようにおもわれ，その発生に関する社会的・心理的メカニズムはもっとも重要な研究問題なのである。それはまさに小論に動機づけをあたえてくれた問題として，後節で検討することにする（第8節）。一言を略記するならば，それは，近代の急性変動社会において，価値体系や役割構造が弛緩ないし崩壊し，あるいは社会構造内の諸部分―社会諸制度や諸組織のあいだに不均衡や機能不全が進行するという不安定状況において円滑な発達過程を攪乱されながらも，生きぬこうとする青年のエネルギー表現と解される。ただし，それらの表出が対社会的にどれほど客観的な効果をあたえうるかについては，楽観的な予言をするわけにはいかないであろう。

第2節　青年文化論の台頭と課題

青年に対する関心および理解の試みは，さまざまの接近や意図からおこなわれている。学校教育・社会教育などの教育における対象として，産業界では労働力の確保や労務管理の観点から，コマーシャリズムの世界では市場にあらわれた顧客の大群として，福祉や治安の当局はそれぞれの社会政策的事業の対象として，さらに心理学では人間理解のための通路あるいは客体として。そして，それらすべての関心と認識は，「青年とはなんであるか」，「青年が他者と区別される特性はなんであるか」という問いに集中される。ところで，私見によれば，かような認識意図は第1節の後半で指摘した三種の動機を主流とするものであるが，特に第三点としてあげたところの，近代にあらわれた青年性の新型に対する着眼が，青年期の研究におおきく拍車をかけ，動機づけを強化したようにおもわれる。

成人や児童とことなった青年性，しかも従来の伝統的な役割体系からはみだしたような青年性は，現代社会における青年層の諸特徴のなかで，その顕著さのゆえに，青年性すべてを統括する典型にされてしまいそうである。はたしてそれは典型なのであるか，一部の青年層だけの特性なのかの問題は慎重な検討を要する。ともあれここで，青年の心理――その意識と行動を記述・説明する心理学の地平は社会科学の次元と連結し，重複が可能になる。というのは，たとえば青年期心性の特徴は，成人層のそれとの対比関係におけることがらであり，青年群と成人群それぞれの集合現象という次元でとらえることができる。そして両世代の特徴的な意識や行動は，生理的次元にとどまることなく，むしろ心理的・社会的なものであることがおおいのであるから，そこには当然，文化の側面が介在しているとみなければならない。また，現代青年における逸脱した新型という特性も，ある種の青年層や青年集団に共通な行動型としてつくりだされてきたものであり，社会現象把握における文化という概念や視角が適用されうる。

ここ三十年間に先進産業社会を基盤として，青年期の社会学的研究が開始され，先行した青年心理学的研究への補完として意義づけられるのであるが，たとえば前記の青年文化の側面などは，中心テーマのひとつとなっている。その当面の関心は，主として，現代青年の現象的新奇さに焦点づけられている。その点だけに終始し，それだけの視野をでないのであれば，不充分・不完全であるということをも，小論は指摘しようとするものであるが，ともあれ，青年社会学分野における青年文化論は次第ににぎやかになりつつある。[1)]

第1節でふれたとおり，特に工業化・都市化・民主化を促進要因とした急性変動社会において，あらためて「青年の出現」，「青年の発見」がおこなわれ，それは成人の目からみて，伝統的な成年役割への期待水準からはみだしたものであって，その意味で青年が既存の社会秩序・価値体系と不整合であることが意識化されたということであった。かような事態を背景として，現代青年の特性への心理学的認識がたかまるようになるのであるが，その特性を青年層・青年群の現象として社会的次元でとらえるときに，おのずから青年文化という概念が適用されるようになる。この概念を使用するにあたっての認識意図は，「青年心理」に注目するとき以上に，総体社会のなかで「違和」をおこさせる下位群としての青年の様態——歴史的現象としての新青年パターンの出現に触発されたものであり，それへの注目の態度が濃厚である。

しかし，社会的関心から出発した概念が，科学的用具に導入されつつある過程でおちいりがちな傾向として，概念自体が一種のシンボリックな効果をはたすところから，その定義や内容にあいまいさがつきまとう。また青年文化の概念の使用を，初発の認識意図のように，現代青年の「みかけ」のうえの逸脱様相だけに限定するのは，文化人類学や文化社会学における文化概念の原義にてらしてみたとき，はたして適当であるかどうか疑問である。さらに現代青年文化の性格を究明するためには，歴史的・社会的に制約されたところの「条件つき」，「括弧つき」の現代青年像に着目するだけでは，社会科学として十分かどうか問題である。

青年文化という概念が社会学の分野で採用されたのは，資本主義文化の先頭をきりつつあり，かつ，その必然的随伴現象としての青少年問題に関しても先進国であるアメリカであった。1942年にかかれたT・パーソンズ（Parsons）の論文[2)]が最初だとされている。以来30年，アメリカは勿論，英・独をふくめて多量の青年文化論が公表されつづけ，特に第二次大戦以

1) Gattlieb, D. and J. Reeves: Adolescent Behavior in Urban Areas, The Free Press of Glencoe, 1963, pp. 60–75.
Smith, L.M. and P.F. Kleine: The Adolescent and his Society, Reviews of Educational Research, 1966, 36, pp. 424–436.

2) Parsons, T.: Age and Sex in the Social Context of the United States, American Sociological Review, Vol. 7, No. 5, (October 1942), pp. 604–616.

後に急増をみたようにおもわれる。しかし私見によれば，理論社会学者パーソンズより以前に青年文化研究の萠芽があらわれているのであって，文化人類学者M・ミード（Mead）が1928年に「サモアの青年」（Coming of Age in Samoa）を書いたとき，青年独特の行動の，ある種のものは，生理的な成熟よりもむしろ，文化的な要因によって説明されることをのべたのは，青年文化という観念にむかってふみだされた第一歩とすることができる。ミードにおいては，明確な概念設定というよりは，視角および観念の提起がおこなわれたのであるが，「青年文化」（Youth Culture）という名称をうちだしたのは，家族社会学者，かつアメリカの教育社会学開拓者のひとりウォーラー（W. Waller）であった。かれは，学校生活の社会学的研究[3]（1932）において，制度的文化とは別種の独特な文化が生徒集団に成立していることを主張し，つづいて1937年に公表した論文において，アメリカ青年の異性交遊に関して独特の青年文化の存在を指摘した。[4]

なお，名辞を詮索するつもりはないが，世界的視野にたってみたとき，青年文化概念の最初の提出者は，実は，ウォーラーでもパーソンズでもなく，今世紀初当のドイツの教育運動家ヴィネケン（G. Wyneken）である。青年文化（Jugendkultur）[5]はかれの思想と実践において，まさに「かなめ」をなすものであったが，今日の青年文化が主として記述・説明の科学的次元で使用されているに対して，ヴィネケンのそれは一種の運動概念・指導理念であって，教育学的・理想志向的な発想からでたものである。ヨーロッパにおける中進国ドイツでは，19世紀後葉のプロシャ的カイザー体制による国家統一，産業革命の進行のもとで，軍国的・封建的な遺制と，自由と欲望解放の近代性とが混沌としてうずまき，それからの脱出をはかる精神主義的な革新運動が，あるいは「渡り鳥」（Wandervogel）あるいは「自由ドイツ青年」（Freideutsche Jugend）の運動として出現した。ヴィネケンは，これら青年運動におおきな影響をあたえた実際的指導者であり，また，理論供給者でもあって，1913年には，雑誌「創業」（Anfang）の主幹となり，また，単行本「学校と青年文化」（Schule und Jugendkultur）をも公刊し，熱烈に青年文化の理念をうったえたのである。そのとくところによると，青年は児童と成人とのあいだの単なる過渡期，または成人への単なる準備期ではなく，それ自身の美と価値とを有し，みずからの生活をみずからの様式にしたがって形成する権利を有する。当時の成人世界に横溢している功利主義・便宜主義・人工的物質生活・合理的知識主義の愚劣さに背をむけ，自然にしたしみ，素朴な感受性をおもんじ，絶対精神の展開を新生活のなかに具現すべきであって，これが青年の課題であり，青年の使命である，と

3) Waller, W.: The Sociology of Teaching, Russell & Russell, Inc., 1932.
4) Waller, W.: The Rating and Dating Complex, in American Sociological Review, Vol. 2, (October 1937), pp. 727–34.
5) Wyneken, G.: Schule und Jugendkultur, Eugen Diederichs, 1913.

いうのである。かような青年文化に託されたものは，社会変革の機能であり，その内容はユートピア的精神性の次元にあり，あくまで実践を指導する理想概念である。ヴィネケンや当時のドイツ青年のいだいた主観性を追体験する意味了解と，われわれがその社会的・歴史的な客観的意義を解明することとは別な次元の問題であって，青年社会学からの接近は後者を指向すべきであろう。ここで注意したいのは，今日の青年文化への視野は，第二次大戦後の急性変動の社会，高度産業化のゆたかな社会にのみむけられているのであるが，ドイツをふくめた第一次大戦前後の事態には，その当時の社会的文化的な特殊条件による個性とともに，今日の青年文化の性格と共通するものが，近代史という枠組のもとで設定できることを無視してはなるまい。また，今日の——いな，近代社会全般を通じての有力な青年文化の一潮流として，ヴィネケンの青年文化概念にこめられていた現世離脱的な理想志向の想念が脈々としていることも注意すべきである。

パーソンズやヴィネケンにふれながら，青年文化概念の発生事情をのべたが，その後今日にいたる30年間に青年文化に関する研究は，米国を筆頭として多様におこなわれ，かつ，その論義にはかまびすしいものがある。そのくわしい紹介や解説[6]は小論の目的とするところではないが，以下で問題の要点だけをとりあげると，まず，現代社会に新奇な青年像をうみだした青年文化とは，「虚像か実像か」，「神話か実話か」[7]という論議がある。虚像論をのべるひとびとの観測するところでは，なにほどかの特殊・逸脱的な青年層があらわれているかもしれないが，それが針小棒大に誇張されていないか，あるいはまた，ジャーナリズムやマスコミ産業が対マーケット戦術として流布した観念ではないか[8]というのである。さらに理論的レベルでの懐疑的なひとびとは，はたして青年に独特な文化であるかどうかが，世代差の研究などによって検証されているかどうか，あるいは，青年文化は結局，今日の全体社会の広範な文化状況——それは単純な前近代社会とことなり，流動的・複合的で錯雑したものなのだが——を反映したもので，独自な存在とする正当性がないのではないか，といった疑問を提出する。

これらの懐疑論は，青年文化への攻撃とするのはあたらないのであって，青年文化論が学問界での検討であるにとどまらず，それより以上に親・教師・ジャーナリスト・政治家その他もろもろの成人たちによってさわぎたてられる事態に対する慎重さからでたものとおもわれる。リューター（E. B. Reuter）は，筆者のしる範囲では，アメリカ社会学のなかにあって，最初に青年社会学の開拓を手がけた人物であるが，かれはすでに1937年の論文[9]において

6) Gottlieb, D. and J. Reeves: op. cit. pp. 60–75.
7) Johoda, M. and N. Warren: The Myth of Youth, Sociology of Education, Vol. 38, No. 2, (Winter 1965), pp. 138–149.
8) Burlingame, W.V.: The Youth Culture, in Issues in Adolescent Psychology ed. by D. Rogers, Appleton-Century-Crofts, 1972, pp. 201–2.
9) Reuter, E.B.: The Sociology of Adolescence, The American Journal of Sociology, Vol. 43, (November 1937), pp. 414–427.

青年文化の観念には到達していないけれども，社会学の視野で青年をとらえるばあいの注意事項として，前述の慎重論に言及している。すなわち，当時からいわれていた青年期の不安定さは，生理的理由よりは社会文化的な産物であり，社会学の究明すべき問題であることをのべたあとで，新奇で逸脱的な現象は注意をひきやすく，その結果，過度に一般化され，現代青年の「疾風怒涛」や「反逆」のモデルがつくられ，今度は逆にそれらが青年層にむけられた社会的期待になりつつあることを警告している。同様に，後年（1965）にシェリフ（M. Sherif）がいわゆる青少年問題の研究[10]において「ひとたび問題が唱導されると，さらに多数の成人の関心を誘発し，問題意識の普及拡大がおこなわれ，ときにはステロタイプ化した虚像と実体とのあいだに乖離がおこること」を指摘している。

このような，神話か実在かの論争は，さらに着実・冷静な考察にうつされたとき，以下の三つの問題点にしぼられていく。ともあれ，大部分の研究者は，現代文明社会の青年になんらかのあたらしい精神のタイプが出現しつつあることを承認するようになっているようである。問題は第一に，青年文化の「定義論」であり，それを判定する規準および標識はなにか，それが真に独特なものとして他と区別される境界線をどう規定するかという問題である。基本的には，青年の特徴に関してすでにえられた，なにほどかの経験的知見を材料として，操作的に構想されるものである。社会科学理論の混乱や後進性は，概念の多義・曖昧さや使用の杜撰という初歩的なことに起因することが多い。青年文化の定義をかためることは理論的枠組の約束ごとを一定させるという価値のほかに，実証的調査をすすめる際の操作的規定としても必要なことである。

第二は青年文化という存在の「実態」を究明する課題である。もとより経験科学的手法によって成果をもとめるほかはない。青年文化の青年層における浸透の程度はどれほどであるか，普及の変化はどうか，青年文化の内容はどのような行動の分野のものであるか，が探索されなければならない。この種の経験的研究は，アメリカ[11]を筆頭として，西欧諸国でも進行しており，わがくにでは，青年文化概念を意識しての調査は，筆者のもの[12]をふくめて少数着手されつつある。ほかに世界的にいって，一般の青少年調査は近時膨大な件数にのぼるのであるが，それらは青年文化の側面をなにほどか採集していることがうかがわれる。ただし，この種の地味な実証作業の方面は，定義論その他の理論面のはなやかさにくらべて遅滞をしめしており，資料の不十分は論議の曖昧さや無用の混乱と無関係ではない。

第三は青年文化が形成されるさいの機制・規定要因と青年文化の機能の問題である。換言

---

10) Sherif, M.: Problems of Youth, Aldine Publishing Co., 1965, pp. 5–20.

11) 代表的なものとして Coleman, J.S.: The Adolescent Society, The Fress Press of Glencoe, 1961, や Renmers (ed): Anti-Democratic attitude in American Schools, Northwestern Univ. Press, 1965 などがある。

12) 未刊であるが，「青少年と成人との世代関係の研究」，1966.

すれば，インプットとアウトプットの解明であり，青年文化の「関連構造」論ともいうべきもので，研究上，これがもっとも重大な価値をもつ。そして，前述の定義論は，簡単な操作的規定の問題であるかのようにみえるのであるが，実は，これまでの諸研究においては定義論をめぐって意外なむずかしさが露呈されており，それはこの第三の問題にからんでいた。つまり，青年文化の関連構造についてどのような見解を仮説とするかによって，定義の設計がかなりの影響をうけてしまうのが実状である。およそ青年文化形成の機制や規定要因には，青年文化を成立させるにいたった社会文化的な背景や誘因の問題と，青年自身における心理的な動因の問題とがある。また，青年文化の機能問題には，青年の社会化過程においてどういう発達的意義をもつのかという面と，成人の支配する社会・文化の総体に対して，青年文化がどのような位置をしめ，どの程度の影響力をしめしうるのかという面とがある。この関連構造論では，心理的次元の論理と社会的次元の論理とを統合してとらえる視角がもとめられる。

ここで，筆者の考えかたのなにほどかをのべておく。それは次節以降の作業における視角や仮説にかかわるものである。

(1)「ひとつの世代・年令階層の性格を理解するためには，他世代との関連を無視しては，充分に達せられない」とは，アイゼンシュタット (S. N. Eisenstadt) がその力作「世代論」(From Generation to Generation, 1956)[13] でのべているのであるが，これはおよそ社会学的視角からの青年研究にとっては，まさにその学問の存在理由になるほどである。青年層は他世代，特に成人層との比較・対比・対応・交渉関係においてとらえられるところに，その真の特徴が理解されるのであり，またその視角こそ社会科学のものなのである。

(2)近代社会に出現したあたらしい青年像という意味での青年文化は，社会構造・文化体系の変動過程の文脈でとらえられ，意味づけられる必要がある。また逸脱的な青年文化は，あくまで歴史的社会の産物という条件つきのものであるから，その意味づけや評価は他型の歴史的社会における青年性と対照させることによってはじめてあきらかになる。この歴史的・比較文化的視角は，巨視的かつ大規模の作業であって，非力な短期間の作業のたえうるところではないが，とにかくそのような展望なしに，現代の青年特性を単独に対象とするのであれば，記述的価値の点ではともかくとして，説明的な理論の洞察はむずかしいであろう。定義上，現代の逸脱的青年の新型だけを青年文化とする論者もすくなくないのであるが，他のさまざまな歴史的社会では，それぞれの典型的な青年文化が形成されてきた事実を無視するわけにはいかない。近代産業社会の青年文化は，むしろ，他種の青年文化との比較検討によって，その独特の性格が理論づけられるというものであろう。

13) Eisenstadt, S.N.: From Generation to Generation, The Free Press of Glencoe, 1956, pp. 23–24.

(3)現代において新奇で顕著な青年文化の内容的特徴はなんであるか,その実態はどうか,それが青年層のあいだに浸透している分布の規模はどの程度であるか，さらに，青年文化を経験科学的におさえる際の標識や規準はなんであるか等々，今日の青年社会学者のあいだでは多様な見解がおこなわれており，一致に到達するまでにいたっていない[14]。なお現代的青年文化が発生・成立する際の社会的・心理的なメカニズムや，特に，それが青年の後続発達に対する影響や社会に対する衝撃効果など，機能の方面になると，研究者のたちばや評価という主観的な要因に規定をうけ，意見のわかれるところとなる。実は，社会科学的研究においてもっとも中心的な価値をしめすものが，ある現象（ここでは青年文化）の社会的意味と機能の理論なのであるが，青年文化論においてはこの点がもっともむずかしい問題である。ある論者は過小評価し，悲観的であり，他の論者は過大評価し，楽観的である。それぞれ研究者の社会変動に対する主体的な姿勢を間接に表現している。筆者のたちばは，現代青年文化の形成メカニズム（インプット）および対社会機能（アウトプット）については「二重うつし理論」をかんがえている。つまり「逃避・泡沫」と「変革・創造」の両方を潜在させているものと解釈する。ともあれ，順機能・逆機能のいずれにせよ，青年文化は社会・文化的変動を過敏に，先行的に，予告的にあらわした人間的表現であることはまちがいない。

(4)青年文化論は青年社会学における中心的なテーマのひとつに値することを先述したのであるが,青年社会学は,教育社会学の一下位分野たる形成社会学（人間の社会的形成に関する理論）に属するという体系上の位置にある。効果的な教育は客体の理解のうえにたつべきこと，したがって現代青年は教育の対象という観点からも充分に理解さるべきことはいうまでもない。現代の社会的変動過程において，独特な自己表現を投射しつつある青年像の理解は，現代人の人間的発達と社会変革の方向を配慮するという教育過程に基礎的につながってゆくであろう。

第3節　青年文化の概念をめぐって

前節において，青年文化研究上の問題点を整理したのであるが，つぎにそれらの重要事項について見解をのべたいとおもう。以下は，現在までに筆者の構築した理論的枠組であり，また，筆者の従事する経験科学的作業を誘導するものであり，逆に実証によって検証さるべき仮説をもふくんでいる。

ここで青年文化とは，「青年層に共通かつ独特な意識と行動の型」と定義する。しかし，

14) Gottlieb, D. et al: op. cit. p. 70.

従来の青年文化論の展開においてみられた論議の経験からすれば，さらに，ややくわしく規準性の解釈をくだしておく必要があると痛感されるので，以下のように咀嚼した補足をおこなっておく。

第一は「青年層」ということであるが，社会の文化的条件によって設定され，認知された年令区間を意味する。成人層との関係では，相補的・相対的な区分であり，また，社会によって期間はそれぞれである。かならずしも10才代だけにかぎる必要はない。現代産業社会であるならば，15才から25才ごろまでのおよそ10カ年を対象としてよいであろう。

第二に，その青年層に「独特な」ということの意味は，「児童や成人と相違する」ということである。ただし，ある種の生理的発達面のことは別として，意識や行動に関して，青年だけしかあらわれない現象は滅多にあるものではない。ありとすれば，それは個人的な偏倚行為としてとりあつかわれる次元のものであろう。したがって，ここでいう「独特な」とはあくまで他世代との相対的な相違である。しかし，相対的といっても，安易に識別さるべきではなく，調査によるそれなりの実証をへたものでなければならない。定性的な標識（たとえば、「あそび志向」とか，「革新性」などのような属性）であるならば，それに関してとらえられた成人群の分布と青年群の分布との間に統計的な有意差が検定されていなければならない。

第三に，青年層に「共通」ということであるが，青年層母集団の内部における普及・浸透の程度に関する問題である。もし，特定の傾向が青年層の多数者に共通であることがわかったばあい，ただちに青年文化の存在を確認できるとはかぎらない。前述第二項の規準を附加して，青年における多数者率が他世代とのあいだに有意差をみいだすばあいにのみ，あきらかな青年文化の存在を判定できるが，差を検出できないばあいにはそれを青年文化とするのは不当である。青年層だけを対象にとりあげ，他世代との比較検討をしないまま，分布の高率にまどわされて，現代青年の特徴とか，青年文化の存在を結論する心理学や社会学の調査研究がすくなくないのであるが，この単純な論理をみのがす弊を警戒する必要がある。他方青年層のあいだで少数派に分布している属性であっても，（たとえばヒッピー族・シンナー族・新左翼学生）それがきわめて例外的な個人的な問題でなく，ある一群の青年の傾向として観察できるのであれば，それも青年文化として認定してよい。勿論このばあいでも，第二項の世代差確認の規準によってチェックされなければならない。要するに青年層には，多数派支配の青年文化もあるし，少数派支配の青年文化もありうるわけである。たとえば生きがいの重点を「仕事」，「余暇活動」，「仕事と余暇活動の両立」という三選択肢で調査したばあい，[1]「仕事中心」の猛烈型や，あたらしい意識構造としての「あそび志向」は，青年のなか

1）見田宗介：現代の青年像，講談社，1968.

では少数派であるが，特に後者は成人世代よりも高率の分布をしめし，少数派の青年文化とすることができよう。

第四に，意識・行動の「型」といったばあいの「型」の意義について検討しておく。勿論，英米における社会科学上の概念として，社会的レベルで成立した生活様式・行動様式の意味でつかっているのであるが，それと関連して青年像の「代表値・平均値」というかんがえや「典型」という概念の異同にふれておく。もともと代表値や平均値とは，定性的な意識や行動の傾向を，なんらかの便法によって定量化し，その指数を計算したときに，母集団や標本の全般的傾向をしめすために利用されるのであるが，それは定性的な標識に関していくつかの下位群にふるいわけられた分布とは同一ではない。特に現代のような多元社会での調査では，成人層のばあいでも，青年層のばあいでも，多様な複数のパターンに分裂するのが普通であって，青年層については「複数の青春」があらわれる。このようなばあいに，点数に翻訳したものを合算して，平均値のような代表値としてあらわすならば，それは偏差の大きい架空のものであって，現実の青年像に対応しないものになる。態度測定のばあいに点数化法を使用するとき，一括した平均値によって青年層の傾向を判断するのは注意すべきことである。むしろ，青年層の下位分類として異種のパターンを分節させ，解釈するのが安全であろう。ただし，代表値法は，青年層と成人層を大別して相互比較するときには，偏差値などに配慮しながら全体としての世代差を検出するためには一応有効であろう。

つぎに「現代社会を象徴する青年の典型」とか，「典型的な青年文化」という発想のばあいのような「典型」の概念には，微妙な問題がある。それは判断の基準によってちがった立言となる。もっとも常識的なたちばとしては，青年のある種の特徴の分布が統計的に多数であるばあいがあげられる。たとえば，昭和44年のNHK全国調査によれば，国民の政治意識において，特定の政党の支持に関心のないもの，つまり政治意識における脱政党傾向は，20才台では80%におよぶ多数派をしめし，50才台の50%とくらべて明瞭に有意差があった。[2] このばあい，脱政党意識を，現代わがくに青年の典型としてよいであろう。ただし，かような統計的典型性とその傾向が「なげかわしい」・「健全である」とかいう価値判断の問題とはまったく別なことであって，混同すべきではない。

もう一つは，ある特徴の青年層が少数派であっても，その特徴の解釈の次第では，それをもって現代青年の典型とする見方がある。それは一種の解釈・予測にもとづいた見解であって，典型の指摘に託した期待や主張のおもむきがうかがわれる。その論拠は，つぎのように関連しあうかんがえかたからなっている。すなわち，「新文化の創造とか社会変革的な価値型があらわれるとき，それは最初は常に少数派である。だから，社会の伝統や統合の側面に

2) 児島和人・秋山登代子：世代ギャップの構造，NHK文研年報，No. 17, 1972, p. 40

でなく，先進変動面に着眼し，未来に関心をむけるならば，青年の少数派にあらわれた新型こそは変化の先ぶれであり，まさに意味のある時代の典型である」と。また，「革新期社会の新精神は，多数青年のあいだに底流として潜在し，それが代表的な一部青年層の思想や行動としてすがたをあらわすものだ」と。さらにいわく，「今日の風潮から予想するに，一部青年層によって表現された新文化は，やがてつぎの時代に，優勢かつ支配的なものに成長してゆくであろう」と。以上のような「典型」観は，現代の一部青年における新傾向を肯定的に評価し，それに期待するたちばからの立論であって，青年文化論者のなかにも散見される。[3] おもうにこの発想法は青年文化の関連構造論の一種であって，示唆と洞察にとんだ，傾聴すべきものがあるとともに，科学的客観性の見地からは用心すべき姿勢でもある。すなわち，新青年文化の発生機序には，それなりの社会的・心理的必然性があるものだし，たといそれが一部少数派の青年のものであるとしても，それが提起しているなんらかの社会的意味はあるはずであるが，はたして未来社会を先取りしているかどうかの予測は，そう簡単にくだせるものではなく，慎重を要するであろう。また，少数の青年が，多数の青年の潜在的な傾向を表出させているという意味から典型性をとなえるならば，表層下に底流するものを探知するだけの科学的手法による証明が必要であろう。なお，ここでは，少数者典型論を，プラスの予測や評価からでてきた事例について紹介したが，これとは逆に，マイナスの診断・解釈からでてきたものもあるのであって，たとえば非行青少年集団の文化を，現代社会の体質的な矛盾や病理を表現しているものとして，現代の典型とするみかたもある。[4]

以上，青年文化の典型性に関する立論をみてきたが，統計的多数を採用するにせよ，社会的に意義ある少数者に注目するにせよ，両者それぞれの意義において，典型とみたてることは一向にさしつかえないとおもう。このような私見は，無節操のようにみえるかもしれないが，現代の青年文化を，一種類の型で代表させようとすることは，そもそも無理な話である。前出第三項でふれたように，現代は「複数の青春」に分解している社会なのであるから，多数派の型も，少数派の型も，それぞれが別個の性格の「複数の典型」とすればよい。ただそれぞれのもっている関連構造的な性格——青年や社会に対する意義と機能について明確な洞察と解釈をくだすことの方に重要さがある。

第五は，本節冒頭でのべた定義における，青年層の「意識と行動」ということについての詳解であり，特にその内容分野の問題がある。組織的観察によって記述されるべきものであるけれども，一応ここでおおまかな様態の範囲に見当をつけるならば，風俗のような可視的な行動型から，価値観やイデオロギーのような内面的なものにわたるし，また，生活分野に則していえば，(1)服装・言語のようなシンボル，(2)あそび・スポーツのような娯楽，(3)芸能

3) たとえば井上俊：青年の文化と生活意識，社会学評論，第22巻第2号，1971年，pp.31—49.
4) 二関隆美：青少年問題，教育経営事典，第4巻，帝国地方行政学会，1974，pp.110～114.

・芸術のような表現的なもの，(4)同輩集団・ギャング・クリーク・サークルのような集団力学的なもの，(5)デート・求愛・その他性的接触など対異性行動，(6)政治運動その他の対社会的活動，(7)戦闘行為・格闘など暴力表現，(8)非行・犯罪などの社会病理，など多岐にわたっている。日高六郎は，第二次大戦後のわがくに民衆のなかの断層を，三つの次元によって分類した。世代の断層とは，青年の側からみれば，ある分野に関して，戦前・戦中の成人とはことなる青年文化の発生を意味する。三つの次元とは，(1)風俗的・感覚的次元，(2)人間関係および生活様式における近代化の次元，(3)イデオロギー的次元である。この三つの次元は，あるときにはかさなりあい，あるときにはほとんど無関係に展開されるという。

青年文化が姿をあらわす場面内容を，あるいは生活の分野に，あるいは生活の次元に則して枚挙分類することは，いかようにも可能であり，それなりの記述的価値があろうけれども，ここでは，基本問題の一つに言及しておきたい。それはウォーラー（第2節参照）このかたのアメリカの青年文化——特にティーン・エージャー——に関する研究において，伝統的に関心がもたれ，評価されつづけてきたのは，風俗的・感覚的な表出文化の方面であった。今日でも，たとえばセバルド（H. Sebald）[6]は，青年文化を明示する諸徴候のなかで，「成人にとって，よく理解できない隠語がつかわれていること」，「成人とは相対的に独立した流行をつくりだしていること」，および「服装など，成人とはことなった標準がまもられていること」をあげている。これにくわえて，第二次大戦後には，世界的規模において，青年層の新奇独特な風俗や感覚が風靡していることは周知のとおりであり，これら青年の外面性は，もっとも世人の注目をひき，違和感をあたえやすい。ところで，文化の概念に依拠して，青年や社会にとっての青年文化の意義を解釈するにあたって，かような表出様式をどううけとめ，どの程度の重みをあたえるかについては一考を要する。

現代の青年自身は，風俗上の新様式について，伝統的価値や権威に反抗し，解放された自己の存在証明を託しているのだと主張することがおおいし，これを支持・評価するたちばの見解もすくなくない。たとえば，「長髪・フーテン・ヒッピー等々，いちじるしく皮相的で瑣末なことと かんがえられやすいが，その実，風俗的領域は種々の価値観変貌の原因であり，かつ，結果でもあり，変革のはしりであると同時に，すべての変革の総決算としての象徴的表現ともかんがえられる[7]」という論もある。風俗や感覚の新奇さが，伝統的価値をくだくブルドーザーの役割をはたす可能性はありうる。それらは，伝統的な趣味や風俗という同次元のものからの解放を意味するだけでなく，一般に伝統的な生活意識や身分感覚の枠から青年をもぎはなす起爆剤の役割をはたす。それらのことをもとめること自体，あるばあいに

5) 日高六郎：世代，岩波講座“現代思想”第11巻，岩波書店，1957, pp. 144—145.
6) Sebald, H.: Adolescence, A Sociological Analysis, Appleton-Century-Crofts, 1968, p. 206.
7) 飽戸・富永・祖父江：変動期の日本社会，日本放送出版協会，1967, pp. 22-23.

は旧体制・旧世代への反抗を表現し，その意味で風俗文化の表層のかげに，あたらしい価値創造の胎動があると推察されないでもない。しかし，すべての新風俗がそうであるとはかぎらないのであって，無意味なエネルギーの消費，精神構造のあさい次元での風潮として泡沫化してゆくばあいが，むしろおおいのではなかろうか。要するに風俗文化は，それ自体では，ただちにその積極的意義を承認するわけにはいかないのであって，皮相的にとどまるばあいと根元的な意味のあるばあいという二元性・二面性のものと解釈される。

新風俗的青年文化の関連構造——発生機序と機能——をどの程度の「重み」のものとして評価するかの問題について，筆者と同様な結論ではあるが，別な角度から接近したものに，イーンジャー（J. H Yinger）の見解[8]がある。かれは文化の概念自体を厳密に検討し，風俗のばあいのような外的・集合的・統計的な類似性だけで，文化の存在をうんぬんするのは不十分だとする。文化を明示する中核的条件は，価値ないし規範的（normative）機能にあるという。文化概念を使用しだしたのは人類学者であるが，かれらが外面・行動面の類似性をとらえて，ただちに文化特性の範疇にいれてしまったのは，理由があると同時に，誤解の種をまいてしまった。というのは，かれらの主要な研究対象は未開社会であって，そこでは，社会の単純さと停滞性のゆえに，外的な様式と内面的な規範とが対応・直結していたにすぎない。他方，社会学者の研究する現代社会では，そうはいかないのであって，規範は複雑・流動的だし，流行のような外的様式は規範性と一致するとはかぎらない，と主張している。

青年文化内容の整理に関連して，一つの問題をとりあげたが，その結論をのべるならば，青年文化には，社会と青年の条件によってさまざまの外的表出が看取され，いちはやく観察者の注意をひくのであるが，文化の性格を規定し，文化の存在を確認するための中核的要因は，内面的な価値や規範の次元の型である。だから，たとえば，青年の風俗性に対して，簡単に文化的な重みをあたえるわけにはいかない。青年の新奇な生活様式が，まさに新価値の出現とむすびついていることもあるし，無関係であって，さわぎたてるほどのことはないばあいもある。教育学的配慮に示唆をあたえる問題点ではあるが，他方，基礎研究としては，実証的調査において，その判別を可能にする手法と洞察がもとめられる。

第六に，本節冒頭でのべた青年文化の定義中の個々の語句に関する詳解というよりは，むしろ文化概念そのものに内包される要件があって，その規準をみたすうえでの問題がある。すなわち，青年の「文化」と判定されるからには，その意識や行動の型がコミュニケーションその他の社会的交渉のうちに形成されるばかりでなく，青年たちがその文化に参加する過程を通じて学習され，伝播・普及・伝達され，あるいは変容されるということがともなうものである。それには一般に，二通りのばあいがかんがえられる。その一つのばあいは，青年

8) Yinger, J.M.: Contraculture and Subculture, American Sociological Review, Vol. 25, No. 5, (October 1960), pp. 620–30.

諸個人が，かれの生活環境への適応学習の過程において，総体社会ないしは部分社会のなかで「青年のもの」として成立している生活様式を個別に摂取することによって，青年文化の伝播普及がおこなわれるばあいである。要するに青年文化の結果的伝播である。二つめは，青年集団の存在を基盤としたもので，およそ青年文化とは青年集団と不可分であり，むしろ青年集団における共同生活のなかから文化が形成され，また，伝達されてゆくのが普通[9]である。その一のばあいの青年文化は，どちらかというと粘着力がよわく，不鮮明なことがしばしばであるが，その二にあげた青年集団を座とする青年文化は，つよい拘束力をもち，また鮮明である。筆者は青年文化をもって広義の現象としてみているのであるが，青年集団とむすびついたパターンだけを青年文化とする狭義の解釈者もすくなくはない。いずれにせよ，青年文化は，青年集団という基盤条件を契機としたばあいに，もっとも明確な姿をあらわしているし，青年文化の構造関連上の性格いかんは，総体社会内における青年集団の位置や機能とむすびつき，左右されている。

第4節　年令段階区分の問題

小論の目標は，現代における特徴的な様相としての青年文化を解明するための枠組を構成することにあるのだが，その「にない手」たる青年自体について，社会学のたちばから基礎的な考察をおこなうことからはじめたい。この手順は迂遠の策のようにみえるかもしれないが，青年および社会にとっての青年文化の意義を理解するためには，やむをえざる必要な前提である。

青年期は人生における一段階であり，部分的な経過期である。そこで，その位置づけと意義とを解明するにあたって，出生から死亡に至るまでの生涯の過程を視野におさめるならば，人生における継続的な心身の変容をとらえる際の単純明快な基礎的カテゴリーとして年令という標識がつかわれるのが普通である。年令は青年期をふくめた個人の変化の段階を区分するとともに，社会におけるひとびとを下位の部分に分化させるばあいのカテゴリーでもある。そこで，なんらかの間隔をもった年令カテゴリーで母集団を成層化したばあいを年令段階（age-grade[1]）とよんでおく。青年期は勿論その一部であるし，発達心理学において，学

9）たとえば Coleman, J.S.: The Adolescent Society, The Free Press of Glencoe, 1961 や Smith, E.A.: American Youth Culture, The Free Press of Glencoe, 1962.

1）J.H. Driberg が Encyclopaedia Britanica, 14th edn., 1929 でのべているように age-grade や age-class の用法は人類学者によってさまざまである。R.L. Lowie が primitive Society, 1920 で H. Schurz の語法にしたがい，年令集団構成として age-class を定義し，単なる age-gradeと区別したが，ここではその用例を採用した。

間的な基準と根拠によって設定された発達段階なるものも，年令段階の一種である。

ところで，発達心理学での段階区分は（たとい区分の仕方に諸説があるにせよ）現代社会での科学的認識から設定されたものであるけれども，具体的な社会において具体的に採用されてきたところの「いきた」年令段階というものがある。人生周期（life-cycle）や人生段階（life stage）として機能的にもうけられた年令段階は，「地位年令」あるいは「役割年令」とも称せられるべきもので，文化的な規定からつくられたものであるから，一括して「社会文化的年令」としておこう。

具体的な年令には以下の三つの側面がある。第一は時間的・物理的年令であって，文字どおり出生以後に経過した物理的な時間の長短を意味し，普通，暦年令としては年（Year）がもちいられる。われわれの生活においては，たとえば教育・就職・福祉その他の場合において採用されることがしばしばである。が，この物理的年令自体は生活にとって，かなり抽象的・形式的なものであることに注意したい。第二は生理的・身体的年令という側面であって，生物としての個体が誕生し，成長し，成熟し，老衰するという推移に関してなんらかの段階をもうけることができる。「あかんぼう」とか「若者」とか「老人」とかは，あきらかに身体的・生物的条件の変化を基礎としている。ところで第三に，人生は時間的現象であり，また，生物的個体の変容過程であるから，これらの時間的・身体的な年令の側面は，人生の段階区分をもうける際の基礎的条件ではあるけれども，十分条件ではない。というのは，生存時間や身体的変化に対する「解釈」や「とりあつかいかた」は，社会によってさまざまな相違があるのであって，つまり文化的な規定をうけるからである。例をあげよう。近世における商人の社会では，40才代で隠居をかんがえたが，現代では40才代の政治家を青年宰相という。今日の15・6才は学校生徒として子どもあつかいをうけるが（成人用映画からはしめだされるし，喫煙をみつかれば，職員会議にかけられて処罰をうける），前近代社会では元服や若衆宿入りをする年令で，一人前のあつかいをうける。近世までの（明治期もそうなのだが）16・7才の女子は結婚適令期とされ，草紙では「22・3は婚期を逸した大年増」とあるが，今日，同年令の女子は青春の季節を自負している。人類学的な比較資料に眼を転ずるならば，時間的・生理的年令にくわえられた解釈の相違はおどろくべきほど多様である。アメリカインディアンのアパッチ族[2]（Apache）は結婚しないかぎり，30や40才になっても「青年」，「少女」とよばれ，アフリカのサンブル族[3]（Samburu）という年長者支配の部族では35才位までのものが青年とされるかとおもうと，インドのオラオン族[4]（Oraon）の男子は

2) Lowie, R.H.: Social Organization, Rinehart & Co., 1948, p. 6.
3) Spencer, Paul: "The Function of Ritual in the Socialization of the Samburu Moran" in Socialization ed. by P. Mayer, Tavistock Publications, 1970, pp. 127–157.
4) Lowie, R.H.: Primitive Society, Boni & Liveright, 1920, p. 304.

11才から12才位で青年宿にはいり，20才までに卒業する。これらの次元の年令区分は，社会文化的な年令と称せられるべきものであって，暦年令や生理的発達を下地として，そのうえに文化的な加工がおこなわれたものである。この文化的加工の結果を社会的役割[5]という。すなわち，社会構造内における特定の座席（地位）がわりふられ，それに応じた特定の行動様式や達成能力が期待される。要するに年令区分というものは，単なる生活時間・生理的発達過程の分節というよりは，社会における諸個人のありかたを配分・限定したものである。年令段階の全体系には，かような役割のシステムという側面があるとするならば，当然，青年期という一区分にも，社会ごとに文化的に規定された役割の一セットという側面があるわけである。この意味で，青年期は社会的所産であるという解釈がなりたち，以上を青年期社会因説の第一種の理由とする。第二種の理由は，青年期の下限と上限，始発期と終了期の社会文化的規定にかかわるが，それはのちに言及する（第5節）。

年令区分や年令段階が地位・役割の一種のシステムという社会文化的な性格のものであるから，それは人生の時間的・生理的な推移とおおかれすくなかれ「ずれ」をしめすことがあり，そのずれの程度は歴史的社会の発展段階によって左右される。この点は，青年期の成立や区分のしかたに関係する基礎的な問題である。また，年令区分における間隔尺度は，物理的な時間を測定する単位であるところの暦年令（Year of age）によって合理的に分節されるとはかぎらない。シュルツは，年令区分は理論的には1年ごと，1カ月ごとなど，無数の段階にわけることもできるし，また10年ごとにわけたり，あるいは30才を境として二つのおおきな段階にわけることもできるのであって，そのような方式が障害となるものではないと指摘した[6]。そして，先述したように（第1節），子ども・若者・成人（既婚者）という3カテゴリーは人類の社会に普遍的かつ基本的な年令区分であるとした。また，アメリカの文化人類学者リントン（R. Linton）[7]は，年令区分は比較文化的に多様であることを指摘し，それにもかかわらず「幼児・少年・少女・男子成人・女子成人・男子老人・女子老人」の七段階が人類社会にとって普遍的な形式だとしている。

ところで，青年期がその一部分であるところの，地位役割システムの意義をそなえた年令区分というものは，どのようにして発生成立をみたのであろうか。勿論，社会が幼老ということなった生理的発達段階の個体から構成されているという生物学的条件が基礎的にはたらいているだろうけれども，すくなくとも人類社会が生物的生活の段階から文化文明を所有する状態に進化したとき，その文化的生存を存続させる必要から発生したことはたしかであ

5) Eisenstadt, S.N.: Archetypal Patterns of Youth, in "Youth, Change and Challenge" ed. by E.H. Erikson, Basic Books, 1963, pp. 24–27.
6) Schurz, H.: Alterklassen und Männerbünde, Georg Reimer, 1902, S. 53.
7) Linton, R.: Age and Sex Categories, American Sociological Review, Vol. 7, No. 5 (October 1942), pp. 593–4.

る。その必要の内容については諸説がたてられているが，たとえばパーソンズ（T. Parsons）[8]やアイゼンシュタットは「社会化機構説」なるものをたてている。すなわち，文化の維持・伝達によって社会を存続させるためには，メンバーの生死という生物学的な社会的新陳代謝を通じ，新入者（子ども）にたいして先行者（おとな）が文化を伝達し，生物的新入者の社会化・精神化をはからねばならないし，かような機能を保証するための方法的機構を生活構造のなかにもうけるとき，それが役割的な年令区分の成立であるという。換言するならば，社会の根本機能としての教育を保証するために，一種の社会関係としての教育関係を年令区分のなかによみとった解釈である。まことに社会化（教育）過程には，おおくのばあい年令段階間・異世代間の社会関係という事態があることはたしかである。

この社会化機構説は，おおまかには首肯しうるものがあるとしても，たとえば老人とか長老という地位の段階・階層の存在について説得力がかける憾みがあろう。そこで筆者としては，パーソンズ説を修正補足するような二つの仮説をたててみた。その一は「生活機能の分業の必要」という要因であって，社会のメンバーの人生における時間的・生理的推移に応じて，共同生活上必要な諸活動を分化させ，割当てるという経緯がかんがえられる。このことは社会組織が未発達・未分化で，年令カテゴリーが主要かつ支配的な分化原理であった上代ないし未開の社会によって検証される。とくに年令区分が役割規定をおびた客観的な標識としての年令階層の意義にとどまらず，各階層単位が具体的な年令集団を結成し，それらが上下にくみあわされて社会構成をつくりあげるという制度化された年序組織（age-class system）があるばあいには，はっきりした証拠がえられる。たとえばアフリカのイボ（Ibo）[9]族の年序組織は八つにわかれ，各年令集団はおのおの独自な社会的役割をはたす。ある集団は村や道路を掃除し，他のものは枝をきり，警備の役目をもつというようにちがった仕事が課されている。南ナイジェリアにおける種族には，十二以上の年令集団があり，第4番目の集団は村の清掃，第6の年令集団は戦闘に従事することになっている。[10] ペルーの古代インカ帝国[11]では，10個にのぼる年令区分がもうけられ，16才から20才までのものは労働者，25才から50才までの段階にあるものは納貢者というように仕事が分化されていたという。しかし，社会の発展にともない，職業や階級の分化がすすむときに，社会生活諸活動の配分機構としては，年令区分は決定的基準たるの意義がうすれてきた。それでも，現代社会では家族・地域社会あるいは社会全体としても，長幼の区分によって依然として活動分担の相違がのこされているし，この基本原理が消滅することは決してありえない。

---

8) Parsons, T.: The Social System, The Free Press of Glencoe, 1951, Chap. VI.
9) Lowie, R.H.: Age Societies, Encyclopedia of Social Sciences, Vol. 1, pp. 482–3.
10) Lowie, R.H.: Social Organization, op. cit. p. 306.
11) Gillin, J.L. and J.P. Gillin: Cultural Sociology, The Macmillan Co., 1948, p. 249.

年令区分の社会的成立に関して筆者のかんがえる第二の仮説は，「社会統制機構説」ともいうべきものである。さきにT・パーソンズの社会化機構説を紹介したときに，新入者に対して先行者が文化を伝達する機能を保証するための地位の配分という解釈をのべたが，これをさらに敷衍したときに，つぎの説明が可能になろう。文化というものは，もっともひろい意味において，社会統制をおこなう力と機能をおびており（拘束力），社会のなかでその文化を体現・守護する中心的なひとびとと追随する周辺的なひとびとがあらわれ，その文化に関する社会的成熟の程度の点で階層分化をおこさせる結果になるし，そのような階層は，文化の単純な社会では時間的・生理的発達を土台とした年令区分となってあらわれる。その際，年令区分とは，文化の枢要な部分を担当・守護する年令段階，つまり，もっとも社会的成熟度のたかい世代（老人層であると中壮年層であるとをとわず）からみれば，その社会の体制を維持する統制的な作用をもつのであり，もっとも萠芽の段階の統制機構といえるであろう。おそらく政治権力といった専門的な支配装置がうまれるにさきだって，社会文化的な年令区分というものが，それにまつわる役割・道徳・規範・威信といった社会心理的作用によって，体制維持の社会統制的機能をはたしたものとかんがえられる。単純な未開社会とちがって，年令カテゴリーの機能力がはるかによわまった近代社会においても，その価値が消滅してしまわないかぎりは，年令区分における体制支配装置の性格はなくならない。たとえば，そのうらがえし，ネガのあらわれとして，変革期における動態のなかには，革新勢力による旧体制への反抗・攻撃が同時に世代対立とかさなり，年令区分の機能が意識されるとか，あるいは旧体制が崩壊していくとき，老・中年の威信が急激に低下するなどの例をみることができる。これらは現代の青年文化や青年運動の現象に対して基礎的な関連をもつものである。

以上，青年期を一区分としてふくめるところの年令カテゴリーの成立について，社会学的，社会史的な考察をおこなってきた。そして，年令区分は個人の人生過程のみならず，社会構造にとっても，もっとも原初的かつ基礎的，普遍的な意義のあることをあきらかにした。ただし，社会の分化・発展にともない，階級・職業その他各種の社会階層や社会的種類があらわれ，年令カテゴリー単独の有効性はうしなわれつつある。たとえば，社会生活での諸個人の役割内容を規定する基準をみれば，事態はおのずからあきらかである。

年令区分やそれとむすびついた年令集団・年序組織はどのように変化し衰退してきたか，その意味や機能はどのようにかわってきたか，年令カテゴリーとむすびつき，あるいはそれといれかわって職業や階級などの他種カテゴリーの発展・展開が個人や社会の様相をどのようにいろどってきたか，ということは社会構造や文明に関する一まとまりの大テーマであり，ここで瞥見のたえうるところでない。そして，未開社会とはことなり，現代の人間や社会の問題は年令区分の観点からだけでは到底解明できるものではないが，それにもかかわら

ず，われわれが現代において問題にすることの一つが青年期なのである。そしてそれは年令区分の一部として，原初的・普遍的な形式からの制約をうけつづけているはずである。青年期には，すべての年令区分と同様に，文化的に規定された一種の役割という側面があり，かつ教育・生活活動の分担や社会統制ということにかかわりをもつことをこの節で確認しておく。

第5節　社会的所産としての青年期

年令区分は人生過程にいくつかの節（フシ）——くぎり点をもうけ，かつ，それが社会文化としてメンバーに共有され，承認されたものであるが，青年期という節はいつにはじまりいつにおわるものであろうか。青年や若者というカテゴリー名の使用はともかくとして，出生の時期をのぞいて，それ以後にあらわれる重要な転機は性的成熟の始期であり，人類のどの社会も，ほとんどがこの時期をなんらかのかたちで識別している。性的成熟は生物的な発達事項であるけれども，社会的にみても，生殖を通じて人間再生産，社会の存続に決定的なかかわりをもつ。また，性的成熟は生物的個体としての能力総体の発達，たとえば，生活課題解決のための体力や，ある種の技術能力の成熟をともなう。かような重要さのゆえに，性的な成熟が開始される徴候のみえたとき——今日の発達心理学用語でいえば，第二次性徴のあらわれる思春期（Puberty）において，前近代の社会のほとんどは，なんらかの様式で社会的な確認や認承をあたえたのであり，その様式のおおくは通過儀礼（Passage rite）[1] とよばれるものである。それは子ども期の地位・役割から訣別するけじめをつけ，そのあとの社会の中核構成圏に進入することの確認や鼓舞あるいは祝福をおこなうものである。

精通・初潮その他の第二次性徴の出現は，今日研究されているように，社会文化的な条件による若干の発達加速があるにしても，種としての人類規模でいえば，大体一定した暦年令の期間に集中している。つまり性に関する身体的・生理的年令は一定している。それゆえに，前記の通過儀礼——人類学者は入社式（initiation ceremony）[2] とよび，わがくに民俗学では成年式・成年礼とよんでいる——は，比較文化的にみて，大体共通して12・3才から15・6才までの間におこなわれる。アフリカから太平洋諸島にまたがる多数未開発社会における呪術的儀礼をともなった入社式，アフリカ・中近東・オセアニアにおいて少年に施行される割礼，西洋の中近世における貴族や武士社会でおこなわれた「デビュー」（début おめみえ式），わ

1) Van Gennep, A.: Les rites de passage, Libraire Critique Emile Nourry, 1909, Chap. VI.
2) Young, F.W.: Initiation ceremonies, Bobbs-Merill, 1965, p. 41.

がくに中近世における元服式・エボシ祝，農漁民のあいだでおこなわれたフンドシ祝，女子に対するカネツケ祝[3]など，これら儀礼の発掘をおこなうならば，興味深深たるものがあるとともに，その多様さにおどろかされる。これらの通過儀礼は個人的におこなわれることもおおく，そのばあいでも対外的・公的な意義を明確にもっているのであるが，そのほか，各個人ごとにではなく，集団としておこなわれる例も非常におおい。すなわち，子どもであったものが思春期に達するや，上位の年令集団（青年集団）に加入する際，その入会の儀礼が同時に地位役割の変化を意味する成年儀礼をかねるばあいである。未開社会における入社式のおおくがそうであるし，わがくに近世の武士社会における小姓組入りや，農漁村共同体における若者組[4]にみられた「宿入り」などがその例である。

さて，青年期の成立とその始期の考察をいそごう。民族学や文化人類学では，「青年」期カテゴリーが普遍的であるとしながらも，思春期における通過儀礼を，「おとな」の社会に参入するという意味での入社式とよんでいるし，わがくに民俗学では「若者」組への入会儀礼を社会的に「一人前」となる「成年」礼と称している。このあたりの概念使用には混乱や矛盾があるともいえるのであるが，実は示唆にとんだ事実が背後にひかえている。

思春期における通過儀礼を典型として，子どもの時期とそれ以後の地位・役割という年令区分が社会文化的に規定されていることは普遍的といっていいほどたしかである。ところでごく例外的少数の事例ではあるが，未開社会のなかでも，ひどく原始的な段階では，思春期における区切り点設定以後は，役割・権限（たとえば性生活や労働作業）のうえで年長者とかわらない社会が報告されている。つまり，「子ども」と「おとな」の年令区分があるだけで，「青年期」のない社会であり，思春期と社会的成熟とが一致する社会である。これは，その社会に蓄積された生活文化が低度であり，その学習・習得が容易であるために，性的成熟の開始期（それは結婚可能年令でもある）にいたるところまでには，一人前の成人たる文化的資質を達成し，社会的に成熟したメンバー，つまり「おとな」となりうるのである。また，それほど低度すぎるとはいえなくて，なにほどか文化の発展しつつある徴候のみえる未開社会でも，年令区分ごとの役割配分があまりきびしく分化されておらず，子どもの社会化が漸進的で，子どもの時分からおとなの生活活動（たとえば性・娯楽・生産・宗教諸活動）への参加が自由におこなわれているところでは（たとえばニューギニアのドブ族Dobu[5]や北

3) 坪井洋文：人生儀礼，日本民俗資料辞典，第一法規出版，1969, pp. 306–8.
4) 若者組については，以下の文献参照。
関敬吾：年令集団，日本民俗学体系第3巻，平凡社，1958, pp. 127～174.
有賀喜左衛門：日本婚姻史論，(日光書店，1948)，著作集第6巻，未来社，1969.
中山太郎：日本若者史，春陽堂，1930.
大日本連合青年団：若者制度の研究，慶応書房，1936.
5) Mead, M.: Adolescence in primitive and in modern society, in "Readings in Social Psychology" ed. by T.M. Newcomb and E.L. Hartley, Holt Rinehart & Winston, 1947, pp. 7–8.

米のシエイエンヌ・インディアン[6] Cheyenne)，子ども・若者・おとなという名称や観念があるにはあるが，それは主として生理的・身体的発達特徴だけへの着眼にすぎず，各年令区分に賦与された役割の相違はあきらかでない。ドブ族にいたっては初潮など性的成熟の徴候を社会的に問題にすることはせず，ごく自然な生物的推移に人生推移をあわせているだけである。端的にいえば，かような社会では，社会文化的な年令カテゴリーが設定されず，またその必要のない社会といえる。

しかし一般的には，性的能力のない年令層とある年令層，生存における依存者と扶養者とは重要で顕著な相違なのであるから，思春期をさかいとして「子ども」と「おとな」との地位の分化が成立する。たとえば，ウォード (B.B. Ward) の報告による香港東部の小島カウサイ村 (Kau Sai)[7] の漁民では，子どもから成人への文化学習がきわめて連続的におこなわれ，15・6才の頃の結婚式が，入社式や成年礼にあたる簡単な区切り点であり，それ以後はおとなのカテゴリーや処遇をうけるだけであって，特別に青年期という分節はない。これを要するに，青年期という年令区分の成立以前に，発生進化の順序としては，思春期を区切り点として，まず「おとな」と「子ども」との二分法が原型的段階区分ではないかと推定されるのである。

今日われわれのいう思春期は，原型的には「おとな」期のはじまりであり，それ以後は成人カテゴリーのなかにはいる。そしてつぎに，「成人」という年令区分のなかから，その初期の部分に下位カテゴリーとして青年期が分節設定されてきたことを論証しようとおもう。筆者は青年に関する比較文化的資料を検討しはじめたころ，シュルツのいうように，青年期区分は子ども期・おとな期と同時に成立した社会的カテゴリーであり，三者はそれぞれ同程度の意義とおもみをあたえられていたという風にかんがえていた。しかし既出のカウサイ族に関するウォードの報告や，つぎにとりあげるところの，わがくににおける成年礼・若者組の資料を検討するうちに，これまでの解釈を修正せざるをえなくなったのである。

わがくに前近代の常民のあいだでおこなわれてきた習俗として，前出のように，個人的におこなわれるエボシ祝・フンドシ祝・カネツケや，集団的におこなわれる若者組入りなどの通過儀礼を，民俗学者たちは「成年礼」とよんでいるのであるが，これは現代人がつけた説明概念であって，当時の常民たちのあいだでは，これらの儀礼を通過したものを「一人前」とよんでいた。一人前とは勿論，社会の資格のある正規のメンバーを意味するものであり，男子のばあいには神事に参加することを許され，ムラ人としての共同労働に参加し，利益の分配にあたっては一人前にかぞえられるようになるのであり，また結婚の基礎資格が生ずる

6) Mead, M.: op. cit. p. 13.
7) Ward, B.E.: "A Hongkong Fishing Village" in Journal of Oriental Studies, Vol. 1, No. 1, 1954.

のであった。初潮とそれにともなう認承をおえた女子の一人前にとっては，もっとも大きな資格は，すぐにでも許される結婚である。これらの事実によっても，13才から15才ごろの思春期におこなわれる通過儀礼は，わがくに中・近世の常民のあいだでも，「こども」が「おとな」のカテゴリーにくみいれられる原型をのこしているし，そのゆえに，民俗学者たちが説明的に「成人」礼という概念をあてはめたのはうなずける。

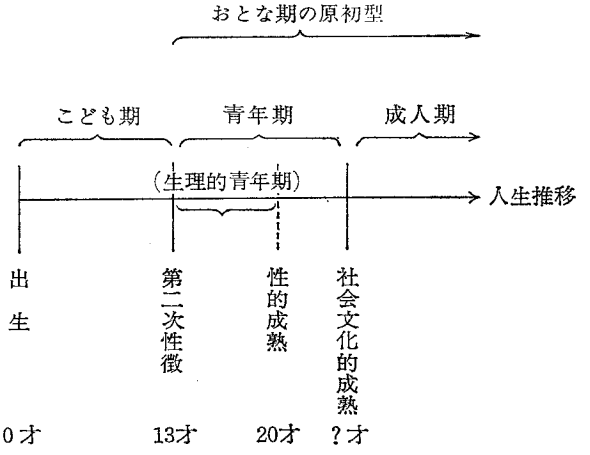
しかし，成人礼をおえて「一人前」になったものに対して，他方では5年ないし10年にわたり「若者」，「むすめ」という呼称があたえられているのはどうしたわけか。その理由は成人礼以後の生活の有様，とくに若者組のような年令集団の意義をみればあきらかである。わがくに近世における思春期のものは，前出カウサイ族が15～16才で結婚したあとは完全な成人として生活するのとはことなり，「若者入り」がおこなわれたということは成人たるの「基礎資格」を獲得したという意味での一人前にすぎず，まだ完全な成人とはいえない。つまり，本当は半人前の一人前なのである。だからこそ，数カ年にわたる若者組の共同生活を通じて性教育を中心とした結婚準備教育，農漁業に関する技術教育，祭事や共同労働その他地域の奉仕活動への参加など，村落社会の公事にたずさわる経験を通じておこなわれる公共心や道徳の教育が展開されるのである。女子のばあいは「女若衆」・「メラシ組」に加入するが，これとて結婚準備教育を中核としたものである。このように若者組生活は，わが国近世村落社会における基本的な教育形態であって，この集団教育を卒業してはじめて，本当の一人前の村の衆，完全な成人となるのであった。おおくのばあい，若衆組生活の終了は結婚の時期と関係している。13・4才から20才あるいは25才にわたる若衆期間が「成人初期」，あるいは「成人見習い」の年令区分であるということのもう一つの証拠として，若者組の集会所・宿泊所には，しばしば宿親がひかえていたという事実がある。それは，村における真の成人群を代表しており，若者に対して監督者・後見人・相談役などの役目をもつものであって，若者層と成人層との橋わたしをする存在であった。

成人期初期という下位区分，あるいは成人への見習い期間として青年期が分節し，成立したいきさつを上記の若者組のばあいを例に考察した。成人期の原型的な始期は性的成熟の徴候が発現する思春期であり，かつ，思春期は生物的次元を根拠としてほぼ一定した暦年令の時期のものであるから，青年期の始期は通史的・通文化的に一定している。すなわち，「若者」という年令カテゴリーをもっている社会では，ほとんどが12・3ないし13・4才からのものを若者とよんでいる。なお，ここではわがくに若者組の事例だけをとりあつかったのであるが，古代ないし未開の社会から近世にいたるまで，若者カテゴリー成立に関する筆者の見解を証拠だてる事例はまことにおおい。一例をあげるとウイルダー[8] (W. Wilder) の報告

8) Wilder, W.: "Socialization and Social Structure in a Malay Village" in Socialization ed. by P. Mayer, Tavistock Publications, 1970, pp. 215–268.

するマラヤの青年調査によれば，男子は12・3才の思春期に達したとき割礼をうけ，性生活と成人生活へのシンボリックな基礎条件をあたえられるのであるが，実際に結婚し，完全な「おとな」とみとめられるのは20才代になってからで，それまでのあいだを青年として遇せられる。

成人期のなかから若者期がわかれて成立し，その結果，原型的な成人区分の初期10年ほどが青年期として独立し，あらたにずらされた真の成人期と対立するようになったのは——青年期成立の社会的条件は一体なんであるか。ほとんどの歴史的社会において普遍的にちかいカテゴリーになっている青年期では，その終了期——真の成人になる区ぎり点はなんであるか，という問題を解明しなければならない。これについては，これまでの諸家によって唱道されてきた「文化因説」あるいは「文化蓄積説」がかなり説得力をもつであろう。それは，文化文明の発展蓄積や複雑化によって，社会的成熟に到達するには，文化学習の質が高度化し，量が増大するために，暦年令のうえでも長期を要し，したがって身体的成熟の推移と一致するわけにはいかず，人間の身体性にくらべて社会性や精神性の成熟がおくれることになる。そこで，生理的な思春期と社会的な成熟としての（真の）成人期との「ずれ」の時期が青年期としてうかびあがる。さきにのべた，わがくに前近代の若者慣行（それも青年文化の一種なのであるが）においてしめされたように，精通や初経を契機として若者組入会がおこなわれたけれども，実際にはそれは肉体面への認承であって，社会的成熟を獲得するには，若者組生活における文化学習が継続されなければならなかったのである。青年期が人類の社会にとって普遍的にみえるのは，生物としての人間に，生理的な成熟がおこるというあたりまえのことだけによるのではない°まったく文化的な理由による社会的所産である。つまり，未開社会とよばれる段階であっても，体力や身体的技術をもって処理できる生活分野のことはともかくとして，神話・呪術・タブー・道徳など，なにほどかの社会統制や精神文化にかかわるものが創造されるにいたる。それらの習得によって社会的・人間的な成熟に到達することが時間的・生理的年令の速度とずれをおこし，そのギャップの期間に青年の地位が設定されたのであった。もとより，青年期は，その社会にとっての基礎的文化を学習することを目的としてあたえられた地位・役割であるから，文化の蓄積がおおくない社会では青年期はみじかく，文化が複雑高度化した現代のような社会では，青年期はますます長期化する傾向がある。今日の高度産業社会では10代後期のものは肉体的にはおとなであるが，一人前の社会人たる資格は25才から30才位までとされる所以である。たとえば現代の法律において，被選挙権を25才以上と規定している国がおおいのであるが，それは市民の代表として信頼のおける一人前の年令を表現している。以上のべてきた青年期の成立に関する「社会的所産の説」を図示したものが次図である。



今日の発達心理学においても，青年期の年令区分に関して二説がある。その二説とも，青年期の始期については人類社会の歴史的慣行と同様に，第二次性徴の出現期としている。しかし，青年期の終期については，人間の発達におけることなった側面をとらえるところから見解がわかれてくる。一つは身体的・生理的見地[9]からみたもので，性機能の成熟，内臓諸器官の完成，体伸長の停止などで特徴づけられる身体的成熟（20才から22才）までを青年期とする。もう一つは，社会文化的な見地[10]にたつもので，人類社会の英知にしたがって，年令区分自体が文化的解釈であり，既述のように，青年期もまた社会文化的に設定されてきたものであるから，その終期を社会構成員の社会文化的成熟と相対関係においてとらえ，文化の状態によって一定しがたいとする。社会科学のたちばは，無論，後者の見地に同調するものである。

青年期区分における期間のながさ，その終了期は，社会ごとの成人性達成の時期および質の基準と表裏関係にある。青年心理学者，津留宏氏[11]がこのことに言及して，青年期の研究は成人規準の解明と関連することを指摘したのは卓見であった。青年期はいつまでであるかの問題について，暦年令上の区ぎり点を設定することもさることながら，それより以上に重要なことは，成人たるの資格に関する内容的・質的な基準はなにかということであるから，ここですこしく，その問題にふれておきたい。それには二つの次元があるようにおもわれる。一つには，成人性の内容的基準は社会によって多様であって一定しがたく，歴史的社会の特殊性によって規定されている。詳細かつ具体的には文化社会学的な考察にゆずるほかはな

9) たとえば，佐藤正・間宮氏・藤原喜悦：青年の心理，岩崎書店，1962年，第2章.
10) たとえば，岡本重雄・津留宏：青年期心理学，朝倉書店，1957，第3章の1.
11) 津留宏：成人特性の発達—青年期の終期測定の研究Ⅰ・Ⅱ，教育心理学研究第11巻第4号(1963年12月)，第12巻第4号(1964年12月).

い。他の一つは通史的・比較文化的に該当するとおもわれる一般的な形式を抽出することからえられる見解であって，具体的な内容はそれぞれの社会によって決定されるにしても，いくつかの生活活動における分野を，成人性設定の際の基準項目として指摘することができる。つまり，以下の四分野について能力を達成することが，個々の社会の相違にかかわらず，成人となるための普遍的な要件とかんがえられる。

第一に結婚が成人たるの標識となっている社会がおおい。子どもとして養教育家族に依存していた地位を脱し，みずからが再生産家族の主体者となり，公認された性生活にはいることである。ただし社会文化によっては，結婚が成人化の原因であるとはかぎらない。たとえば，わがくに近世の若者文化をみると，青年時代を通じて，適当な程度の文化学習をおこなった結果，ころあいをみはからって結婚し（「そろそろ身をかためるべき時期だ」という自認および他者判定による），結婚にふみきり，その結果はじめて「一軒前」——完全な社会人とみとめられるばあいは，あきらかに結婚が成人化の原因になっている。ところが，西洋13，4世紀のギルド社会においては職人（Journey-man, Geselle）の地位のものが親方試験を通過し，成熟した職業的技術および市民的徳性の所有者となったことを証明したのち，はじめて結婚をゆるされたばあいは，成人化の結果が結婚につながることになっている。いずれにせよ結婚は，成人化とかたくむすびついていることはたしかである。第二は，経済的生産能力・経済的独立という基準である。内容的・質的には，それぞれの社会の産業構造・技術水準によって多様ではあるが，この分野において能力を達成することが不可欠の要件となっている。ただし成人役割，したがって青年役割を検討するばあい，男女の社会的性別役割の分化を無視するわけにはいかないが，ここでいう経済的能力とは社会的物質生活遂行のうえでの分担をも包括するものとしておく。第三に政治的成熟の基準分野があげられる。これもまた未開部族社会であるか，封建社会か，近代市民社会かなどによって内容はおそろしくちがっているのであるけれども，一定の体制・組織・集団の秩序のわくぐみに適応して人間関係的な問題の処理をおこなう能力という基準である。第四は，社会構造内に分化した主要な地位役割を選択的に取得し，そこでの役割行動の安定した遂行力を立証することである。現代であるならば，職業役割と性別役割がおもなものであろうが，役割それ自体の種類と内容は，これまた歴史的社会ごとにきわめて多様である。

以上四つの分野は，成人としての社会的成熟を獲得するうえで，それぞれの具体的内容特性はともかくとして，ぜひ一定の能力を充足させるべき普遍的カテゴリーにおもわれる。個人は青年期生活を経過しながら成人期に接近するにつれ，上述の四分野に関する一定水準を達成すべく，拍車をかけざるをえない。その様相は，比較社会的にみた青年生活史のなかに展開されるのであった。そして，学校教育のような制度的教育がないばあいでも，生活構造全体がすなわち教育構造として設計されていたことに注目すべきである。なお，青年期と表

裏の関係にある成人基準の問題は，いわゆる発達課題なる概念に関連することを注意したい。それは心理学・社会学的概念というよりは教育学的概念であって，青年期心性の特徴を配慮しながら，青年期進行の方向にまちうけている社会文化的な成人基準に関して教育学的価値判断をくだしたものである。青年期の課題として枚挙される事項には（たとえばハヴィガースト[12] Havighurst のばあいなど），上記の成人基準達成のための普遍的カテゴリーと，現代アメリカの社会文化的な特殊条件からの要請とが混在していることをみることができる。

社会の発展にともなう文化の蓄積によって，おとな期の初期の部分が分節して青年期カテゴリーが創設されたという論旨にたちもどるのであるが，近代社会における文化の質量の肥大化にともない，青年期が長期にわたるようになると，それがおとな期から派生したという原型的な意義がうすれ，青年期は子ども期と成人期との両段階に対して中間的なものとしての独自性をおびるようになってくる。だから，今日では，青年期をもって「過渡期」とか「橋がかり」とか「移行期」とみたてる認識が優勢になった。社会（成人）の側でも，青年自身も，青年期を「子どもでもおとなでもない時期」，「それ自体独特な時期」と評価し，また客観的にもそのような観念に対応する心性が形成されてきた。これは青年期の地位役割に関してあたらしい規定と事実があらわれてきたことを意味するし，社会史的にも特記すべき意義をもつ。前近代社会における青年が「初期のおとな」，「おとなの見習い」，「インターン成人」たる役割において，その当時の成人基準の達成をめざして直進し，しあげをいそぐかまえが形成されていたのにくらべて，現代青年はその中間的な「中吊り」の座標ゆえに，不明確・不安定な心理を発達させつつあるのであって，この点からも周辺人（marginal man）として特徴づけられるのは首肯できる。子どもはその非力・未熟や文化学習の不充分さのゆえに依存者としての地位をあたえられ，おとなの世界に服従せざるをえず，他方おとなは社会的生存と秩序の担当者として現実的な役割行動に固着せざるをえないのだが，「中吊り」の地位にある青年層は，成人の護持する社会体制から相対的に遊離することができるようになっている。それは，あるときは不利に，あるときは有利に，あるときは逃避的に，あるときは革新的にうごくことのできるたちばである。そして，この地位こそ，現代青年文化の独特な性格を形成する基礎的な根拠であり，背景であることを強調しておきたい。

ただし，かような巨視的な論理だけによって，現代の具体的な青年文化の様相が説明できるとするのは早計である。現代における青年個人の発達過程と，その集合現象である青年文化の独特さが発現するのには，上記のような巨視的なわくぐみを誘因とするけれども，さら

---

12) Havighurst, R.J.: Developmental Tasks and Education, Longmans & Green, 1948, pp. 38–42.

に他の種の中間規模の社会的諸条件が媒介的な動因としてはたらくからである。青年文化の逸脱的性格とかいわゆる青少年問題の発生にとって，青年期長期化説や，青年の地位の中吊り説は間接的な背景の一般理論として妥当するのであって，直接的な関連や因果の点では単純にすぎ，説明不充分である。

なお現代の青年の中間的な地位に由来する別種の問題についてふれておきたい。その地位は年令区分体系のなかで浮上した中吊り的な性格をもつことを指摘したのであるが，「子どもでもなく，おとなでもない」ということは「ある面では子ども，ある面ではおとな」だという混乱した混交的な状態をも意味する。だから，文化人類学者リントン[13] (R. Linton) は現代社会を，「きちんとした青年役割の認識が欠如した社会」と規定し，青年に対して子ども役割と成人役割との矛盾した処遇がこもごもいりみだれていることを指摘している。青年は，あるときは「まだ子どもだ」として服従・保護・依存の関心をもってみられ，ゆるされてもよいような特権からとおざけられ，社会的実践の場に参加してその力量を発揮しうるような機会をうばわれることがしばしばである。かとおもうと，「いつまでも子どもではない」，「あまえるな」，「独立心をやしなえ」として現代社会の複雑・高度で競争的なエトスへとかりたてられる。この二重の処遇は現代青年期心性における矛盾的性格を形成しないではおかないのであるが，また，とくに高度産業社会では，青年の権利・威信・自由が拡大し，その地位と価値が向上しているようにみえる反面，教育期間や経済的依存期間が長期化し，福祉的厚遇がますことによって，客観的には，青年期における子ども的地位の側面が濃厚になりつつある。つまり，青年期への子ども期の侵入であり，10才代後期ぐらいまでは，「子ども期の延長」であるかのような観を呈しはじめている。この点は，家庭や学校生活に関して成人・青年両世代の意識調査を施行すれば，しばしば出現する徴候である。

本節において，筆者の指摘したかった要点は，年令区分の一種たる青年期は，生物的事実である以上に社会現象であり，しかも社会文化の発展過程において創設されてきた形象および観念であるということである。また，その歴史的経過に関して仮説を提出した。すなわち第一段階として，青年期カテゴリーが成立する以前に，まず思春期を切点として，おとな期と子ども期という地位カテゴリーが分化し，つぎに第二段階として，文化の蓄積にともなって，成人期のなかからその初期部分に青年期という観念および地位役割が分節した。第三段階は，特に近代社会に該当する事象であるが，文化の蓄積が一層高度化することによって青年期が長期化し，その結果，子ども期とおとな期の中継期間となり，両者に対して独自性と遊離性をおびるようになった。この点は現代青年の特質や文化を把握するうえでの基本的な

13) Linton, R.: Age and Sex categories, American Sociological Review, Vol. 7, No. 5 (October 1942), p. 596.

背景要因である。この理論はいまだに仮説の段階のものであるから，歴史的および比較文化的手法により可能なかぎりさまざまの社会の青年生活の実相を収集し，検証をすすめる必要がある。また，こまかくは，入社式・成年礼・若者組等々，これまで人類学や民俗学の先輩研究者によって収集された資料については，筆者の理論的再検討は充分でないとおもっているし，さらに，これらはそれぞれ独立の各論としての価値もあり，単に前近代現象として解釈するだけでなく，現代の青年文化の性格をうきぼりにするためにも，有用な対照資料とかんがえている。

第6節　青年役割文化

すでに第3節において，青年文化の定義を検討した。それは，かような鍵となる概念を適用しつつ理論構成をすすめるうえでの基礎をかためるためであり，かねて，実証的調査研究のばあいの枠組を準備しておくためであった。そこでは，青年文化をもって，「青年層に共通かつ独特な意識と行動」であって，「成人層と相対的にことなっている型」としておいたのであるが，かような一般規定のかぎりでは，通史・比較文化的にいって，社会文化的所産としての青年期が認知され，総体社会内に青年層が存在するばあいには，ほとんどどこにでも該当するものをみいだしうるのであろう。しかしながら，青年文化の形成過程やその機能を必理・社会的に検討するところの関連構造論的見地にたつならば——それが青年社会学的にもっとも重要な視角なのであるが——，いくつかのことなった下位タイプを分化させざるをえないのである。

まず最初に，筆者が「青年役割文化」と命名するものが析出されうる。すでに第2節「青年文化論の台頭と課題」において指摘したように，現代の青年文化論の認識意図は，今日の新奇で逸脱的とおもわれる青年性によって喚起されたものであるけれども，ここに提出する青年役割文化は当世風のものと対立する性格のものであるし，むしろ，よりながい歴史的伝統をもち，より普遍的な現象であって，今日の新型の特殊性を究明・評価するうえにも，対照的基本型としての意義をもつ。青年文化は，前出のような一般的・形式的な定義をとるならば，歴史的にも，比較文化的にもごく普遍的な現象であると思われるのだが，それは青年文化のなかでの役割文化という下位タイプが広範かつ支配的に存在していたことに起因する。

第4節「年令段階区分の問題」において，社会の総成員を分化させる基本的かつ原始的カテゴリーとしての年令区分は，人間の生涯における時間的推移や生理的変化を下地としながら，それに文化的な加工をおこなった社会的所産であることを論じ，さらに第5節「社会的

所産としての青年期」においては，年令カテゴリーの一種としての青年期は，社会の文化的発展の結果，成員個々人の社会的・精神的成熟への進行を保証する必要上，人生段階のなかで特に後発的に分節されたカテゴリーであることを論証した。つまり，青年期は二重の意味で社会的な産物なのであり，そうであるからには，青年期という観念や認知には，社会によって外因的にわりあてられた地位・役割という側面がふくまれており，「青年」としての権利と義務，価値観や規範——要するに役割期待がともなっている。

そこで，青年役割文化の理論の第一は，その形成過程に関する問題なのであるが，それは比較的単純明快である。個人の発達における社会化過程を通じて，それぞれの社会に固有かつ安定して成立している青年への役割期待に適応し，積極的に役割取得の学習をおこなう結果，その社会の青年層には共通・独特なパターンが形成される。かように，青年文化の成立の経過からみれば，たとい青年が主体的にうけいれ，自己確認（self-identity）がうまくいっているとしても，客観的にみて，青年役割規定は歴史的社会が創造した文化的産物であり，青年にとっては外因性のものであり，外的拘束性への従属なのである。

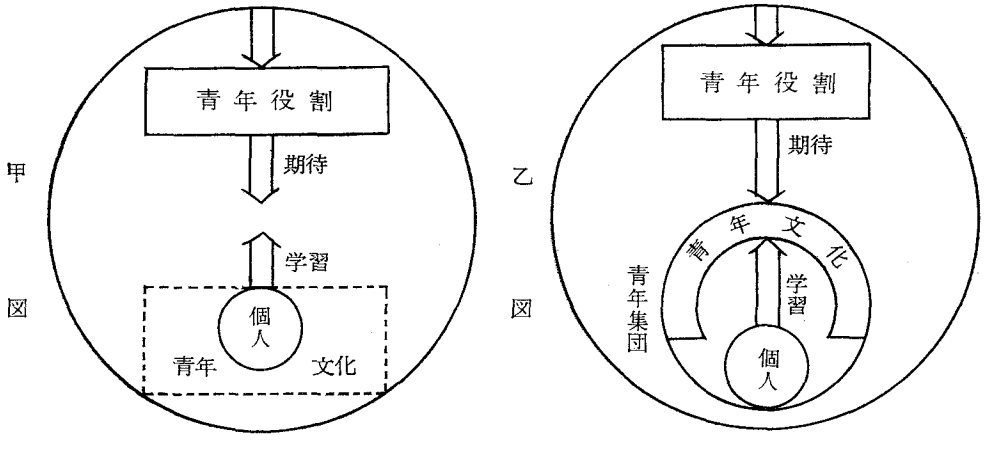
第二に，かようにして形成される青年文化の，総体社会の構造や文化に対する位置とか，他世代（特に成人世代）との関係はどうであろうか。それは「役割」なる概念の使用によって，すでにあきらかであるように，社会の総員に対して配分された諸役割のうちの，特に青年層に賦課されたものであり，全体としての役割体系ないしは文化体系を構成する部分なのである。それは青年独特のパターンであって，成人の生活様式とは「相違」しており，その意味で成人役割とは「非連続」であるけれども，同時に，「青年らしいこと」として，成人社会から支持・承認をうけており，社会構造の総体において「整合性」をしめし，調和している。青年「役割文化」とはかような性格にもとずいての命名なのである。

第三に，それは青年の人生過程，青年の社会化過程にとって通過段階としての教育的意義があり，「通過文化」とも称されてよいであろう。成員の社会的人生に対して，子ども・青年・壮年・老人それぞれの役割が設定されており，全体として役割体系という文化が形成されているばあいには，それぞれは分業・特権・勢力などの配分であるだけでなく，人生進行における学習ステップ，経験の配列として機能している。青年役割文化は，人生カリキュラムにおける配列上の一大単元とみなしうる。またそれには，特定社会での個人の生涯学習の進行を青年段階で保証する効果がみとめられる。

第四に，対社会的な機能の観点からみれば，その基本的な価値は社会体制・価値体系の維持に貢献し，社会の統制と安定をたしかなものにするという保守的なはたらきにある。すでにあきらかなように，青年役割文化は，その前提ないし背景として，青年役割を構成部分とした役割体系が安定して成立していなければならず，かようなことは停滞性や伝統性がつよいか，あるいは強力な社会統制によって社会規範のシステムが結晶している社会において可

能なのである。ゆえに，一般的には，この青年役割文化モデルが適用されるのは前近代的な社会を典型とするのであって，歴史的にいくらでもみいだされる風俗・性愛・祭祀・教育などをめぐる青年文化は，大部分がこの種の役割文化的な機能をもつといいうる。

以上4点にわたって，青年役割文化の基本特徴を規定してきたのであるが，なお解明すべきいくつかの問題点に言及しよう。まず，補足事項の第一は青年集団との関係である。青年役割文化は，青年期の発達過程を通じて学習がおこなわれる際，社会環境のなかに客観的に成立している青年への役割期待に適応し，それを取得することが個人レベルでおこなわれ，その結果として青年層に意識や行動の共通パターンが，その社会での青年性として形成される（甲図）というだけではない。



むしろ乙図のように，総体社会のなかに年令的同輩集団の一種として青年集団が結成され，それが青年役割文化の基盤であり，保持者であるばあいの方が歴史的社会での主流となっている。青年役割文化は，具体的な青年集団によって体現されたばあい，鮮明かつ強固であり，持続性がつよい。そして子どもは青年集団に参加することにより，青年役割を学習し，その社会の青年性をおびるようになるのである。

青年役割文化のばあいのみならず，一般に青年文化は青年集団とむすびつき，それを座としていることが社会史上の常態である。この点については，前第3節「青年文化の概念をめぐって」の末尾に伏線として言及しておいたのであるが，ここで青年集団の歴史的諸型につき，素描をこころみておこう。そのばあい，社会史的・比較文化的な資料を駆使しながら，社会構造との関連で青年集団の性格をとらえるという巨視的な接近法をもちいたほとんど唯一の労作として，例の S. N. Eisenstadt の世代論（From Generation to Generation, 1956）があるのであるから，主としてかれの説を参考にすることが有益におもわれる。かれ

は,[1] 特殊的な (T. Parsons のいう particularistic) 価値志向の支配する家族制社会 (Familistic Society) を吟味した結果，そこでは，家族——拡大 (extended) または親族 (kinship) としての規模のものであるが——が原理的にも実態的にも一つの共同体を構成しているのであって，かようなばあい，老壮若幼の年令的カテゴリーやそれにともなう役割が分化しているけれども，青年集団は成立していない，ということをみいだしている。個人の発達過程は家族的共同体のなかにとざされ，そのなかで地位・役割の推移がおこなわれる。教育学的にみれば，人生のすべてが家庭教育でおおわれている社会といえよう。

ところが，部族社会，あるいはそれ以上の規模と構造をもった共同体が出現するようになり，特殊的価値志向にしがみついた家族制原理が制限され，ひらかれた公けの——パーソンズのいう普遍主義的[2] (universalistic) な原理が優越するようになると，タテの家族制原理をのりこえ，それを横断する横の公共カテゴリーにひとびとを編入することがおこなわれ，かような社会発展の一環として青年集団が形成されるようになる。つまり，青年集団の起源は，社会が家族制支配から脱して，公的な共同体秩序へと発展する段階を契機としていると推測されるのである。そして,前近代社会での青年集団には，(1)各年令区分・年令段階 (age-grade)というカテゴリーに対応して，具体的な年令集団が結成され，それらの立体的なつみかさねによって社会の総体が構成されるところの年序組織 (age-class-system) が存在し，その階梯的部分に青年集団が位置づいているばあいもあるし，(2)年序組織はほとんどないか，あるいは存在していてもルーズである共同体において，青年集団だけが明確に結成されているばあいとがある。[3] それらの相違が生じる条件については，社会人類学的な検討にまつほかはない。ただ，一種の解釈として，各年令集団が累積して，一つの社会が年序組織をそなえるばあいは，あくまで家族組織をのりこえた公的なヨコの原理の出現を意味するものであるけれども，タテ構造もまた拡大され，年令身分が共同体規模で制度的につくりだされたという意味で，家族制の疑似的な拡大変容とみなすこともできよう。

さて，社会史においてきわめてふるくから成立したとおもわれる青年集団の機能はなんであったろうか。年令のちかい若者同士のあいだに親近性がうまれるという自然な心理による以上に，特に青年のあつまりが共同体内で制度化されるという点を問題としてみたばあい，いくつかの条件がかんがえられる。その一つは，人類学者の観察[4]から推論されるものであ

1) Eisenstadt, S.N.: From Genelation to Generation, The Free Press of Glencoe, 1956, pp. 36–41.
2) Parsons, T. and E. Shils: Toward a General Theory of Action, Harvard Univ. Press, 1951, pp. 61 ff.
3) Eisenstadt, S.N.: op. cit. Chapter II.
関敬吾：年令集団，日本民俗学大系第3巻，平凡社，1958，pp. 127—174
4) 吉田禎吾：青年集団の文化人類学的考察，青年心理学講座第4巻，金子書房，1955，pp. 193—196.

る。制度的年令集団は狩猟・遊牧・漁撈をいとなむ社会や，また，戦斗的な社会におおくみいだされるとおり，共同体の生存にとって，つよい体力，かたい組織力を必要とするばあい，それが青年の自然的発達にもとづくエネルギーに期待されるからであろう。これは社会的機能の分業・分担が，年令集団にくみあわされるというばあいである。ところが，わがくに近世における農村は，遊牧的・戦斗的社会でないにもかかわらず，若者組制度をもっていたことも周知の事実である。そこで二つめにかんがえられることは，教育や公的な社会統制という機能である。若者組にかぎらず，制度的な青年集団の存在する社会では，他世代とはことなった青年役割（本節でいう青年役割文化）が明確につくられており，また，青年期への進入は，青年集団への加入を意味し，かつ，その時期にあたっては入社式などの通過儀礼がおこなわれるのが一般である。そして入社式とは，家族原理のなかに埋没していた子どもが，家族と母親からひきはなされ，共同体の公的なメンバーとして訓練をうけはじめることを象徴するものであった。青年集団は，養教育家族の私的・特殊的価値の世界から，共同体の普遍主義的な価値の世界へと社会化がすすむ際の教育機関であり，「公け」の社会統制に奉仕するものであった。

かような前近代的な青年集団は，各年令集団が年序組織を構成しているばあいの階層的部分であるときは，あきらかに直接の共同体規制のもとにおかれ，成人社会の管理をうけている。[5] また，成人からの統制が直接的でなく，青年集団の自律性がある程度許容されている場合でも，わがくにの若者組には，監督者としての「宿親」や相談役としての「中老」が背後にいて，青年集団と成人社会との橋わたしをしている例のように，[6] 結局は成人世代から間接統制や遠隔操縦をうけていたのである。要するに，青年役割文化を保有している青年集団では，その青年文化が総体社会の役割・文化体系のなかに整合的にくみこまれているのと同様に，青年集団もまた，社会構造のなかに整合性のある部分として組織づけられているのである。

以上，アイゼンシュタット流の仮説に示唆されて，青年集団の歴史的進化段階を考察したのであった。すなわち，(1)家族制支配の社会において，青年というカテゴリーと役割は発生しているが，青年集団はできていない段階，(2)公的な共同体体制の成立とともに，年序組織の一環として，あるいは独立に青年集団が結成され，かつ，直接に共同体規制下におかれている段階，(3)さらに，青年集団の自律性と成人支配からのある程度の離隔があらわれるが，結局は間接管理ないしは遠隔操縦をまぬがれていない段階が設定される。これらいずれのばあいにも，青年文化が形成されるとすると，それは「青年役割文化」という性格のものであ

5) Eisenstadt, S. N. : op. cit. Chapter II.
6) 中山太郎：日本若者史，春陽堂，1930, pp. 84—88.

る。そして，この種の青年文化以外の下位類型が近代社会にあらわれるとすると，それは青年集団が成人社会や社会構造から自由となり，遊離した存在となる社会的条件があらわれる必要があることが暗示されるであろう。それは後節の主題である。

つぎに，補足的問題事項の第二として，青年の発達過程における役割学習の連続・非連続ということ，それと関連して青年期心性の動揺や成人との世代関係の緊張について考察したい。さきに，青年役割文化は青年独特のパターンであって，成人役割とは「相違」しており，「非連続」であるけれども，社会の役割体系の総体に対しては「整合」したものであるということを指摘した。それならば，かような青年役割文化が支配的な社会での青年期心性や成人との世代関係にはどういう傾向がみられるであろうか。この問題は青年性の社会文化規定というテーマにつながる。

身体的・生理的特性のような，発達における成長の側面はともかくとして，青年期心性の普遍性がうたがわれ，社会文化的条件による相対性がみとめられるようになったのは，ミード（M. Mead）やベネディクト（R. Benedict）をはじめ，それにつづく多数の比較文化的な実証研究の成果によるところがおおきい。欧米の，いわゆる文明社会における青年に，「なやみ」・「懐疑」・「反抗」・「理想主義」・「ロマン性」などが顕著であり，情緒的・内面的な動揺・緊張や社会的葛藤が多発しており，そこに，不適応や危機の時期としての現代青年像が一般化されるのであるが，社会的条件によっては，これらの諸特性が観察されないばあいがすくなくない。かような検証作業の嚆矢は，ミードの有名なサモアの調査[7]であって，子ども・わかもの・おとな期の進行にあたり，労働・性生活・あそびなどの基本的生活分野に関して，諸習慣の習得学習が徐々に連続的に抵抗すくなくおこなわれ，その結果，青年には心理的・社会的な適応困難を表現する特性はあらわれないと報告したのであった。要するに，サモアの社会は，青年期のものに対して子どもや成人とことなった義務・規範（青年役割）を期待することがなく，社会化が連続的に進行し，世代関係の接合も円滑である。このように青年期について文化的な特別のあつかいのとぼしい社会では，青年に独特な心的特性が出現しがたく，したがって青年文化とよべるものも形成されがたい。むしろ，青年期が不明確であるか，あるいは存在しない社会といってもよいであろう。

ところで，発達してゆく個人に対して社会とその文化がはたらきかける際の連続性（continuity）・非連続性（discontinuity）の概念をさらに理論的にとりあげたのがベネディクトである。かの女は子どもから成人への移行過程[8]において，無責任と責任，あそびとしごと，服

7) Mead, M.: Coming of age in Samoa, William Morrow and Co., Inc., 1928, and Adolescence in primitive and in modern Society in Readings in Social Psychology ed. by T. N. Newcomb & E.L. Hartley, Holt Rinehart & Winston, 1947.

8) Benedict, R.: Continuities and discontinuities in cultural conditioning, Psychiatry, Vol. 1 (May 1938), pp. 161–167.

従と支配，性欲求の禁圧と許容などの諸分野の学習が，未開社会では連続的に進行するにくらべ，現代の西欧社会では非連続であって，地位・役割の変化が急激かつ矛盾をふくむところから，青年の適応困難や世代間の葛藤が結果すると説明している。ベネディクトの論では，発達過程における文化学習の「連続と非連続」とが「未開社会と現代社会」とに対応されているのであるが，このような単純な図式化はもうすこし仔細に吟味する必要があると思われる。特に前近代社会において広範かつ優勢に存在していたと筆者の指摘する青年役割文化に適用してみたとき，どう理解したらよいであろうか。

ミードの観察した「青年の悩みなきサモアの社会」では，子ども時期から生産的労働などの社会的責任に参加がおこなわれ，性生活は社会的に隠蔽されることなく，自然に経験されていた。これに対し，文化が単純で等質的な未開社会であっても，青年期のものに，子どもや成人とことなった役割が期待される社会はいくらでも調査されているのであって[9]，たとえば年序組織をもつニューギニアのクウォマ族（Kwoma）では，青年期だけに適用される食物のタブーとか，見習いとしてのはげしい労働訓練，性経験が露見したとき課せられる処罰などが観察されている。これらはあきらかに他世代のものと「相違」した役割であり，クウォマ族では，「非連続」の社会化過程とその結果としての青年期心性の緊張や適応問題があらわれている。かように，あたらしい生活慣習にきりかえる学習が要求されるという意味での非連続性は，現代文明社会だけのことでなく，前近代の青年役割文化を保有する社会では一般的な現象である。青年役割文化はもともと，ベネディクトのいう「文化的学習の非連続」において成立したものである。

ところで，青年役割文化の非連続性はどういう世代関係をひきおこしているのであろうか。前近代社会にあっても，役割学習が非連続であれば，そこに，なんらかの程度に青年性の疾風怒涛（Strum und Drang, Storm and Stress）があり，同時に青年と成人とのあいだに世代間の緊張があるとみなければならない。なぜならば，役割の相違・非連続が規定されておれば，成人世代の勢力や権利の方が優勢であるのが普通であって，他方成人の地位に接近しつつありながらも，制限された勢力と規範とを規定されがちな青年層は，当然，成人世代に対して緊張・対抗心・敵意を潜在的にいだかざるをえない。事実，アイゼンシュタット[10]は原始（未開）社会から近世にいたるまでのながい前近代社会における世代間緊張の事例をすくなからず指摘している。また，精神分析学の発想をとりいれた文化人類学のなかでは，前近代社会に広範な世代対立[11]を役割対立としてとらえるのでなく，エディプス・コンプ

9）たとえば Whiting, J.W.M.: Becoming a Kwoma, New Haven, 1941, pp. 65–105.
10）Eisenstadt, S.N.: op. cit. Chapter II, III.
11）Whitings, J.W.M., R.C. Kluckhohn and A. Anthony: The Function of Male Initiation Ceremonies at Puberty, in Readings in Social Psychology ed by E. Maccoby et al, Holt Rinehart and Winston, 1958, pp. 359–370.

レックスのメカニズムが青年男子層対成人男子層という集合的次元に拡大したものとして説明するたちばが優勢のようにみえるほどである。

しかしながら，私見として，青年役割文化の優勢な社会では，世代関係における緊張や敵意が成立するのは当然であるが，それは心理的レベルの潜在性のものであり，社会的レベルの顕在的な葛藤にまで発展しにくいと判断される。むしろ，青年役割文化には世代間の葛藤が社会的レベルで公然化するのを抑止・中和する装置として機能する側面があることを指摘したい。なぜならば，役割なるものは，単独の個別現象でなく，他者との関係文脈におけるものとして成立するのであって，もともと諸役割の総体，つまり役割体系のなかに，関連部分として位置づきながら結晶するものである。つまり，既説のように，他世代の役割とは相違しており，非連続でありながらも，全体としての役割体系としては整合するように，歴史的社会の営為と経験により創造されたものなのである。

その緊張中和の装置を具体的にしらべてみると，第一に，年令役割の相違ある配置にもかかわらず，そのような非連続を超越するものとして，共同体の価値体系を貫通する優勢で強力なエトス・規範が共有されており，世代間の対立や緊張はそれによって抑圧されるようになり，青年は自己の欲求不満を自己抑制し，耐忍する態度が形成される。たとえば，わが国近世の若者集団における若衆定目[12]では，結局は農漁村共同体における封建的全体性へ服従することが優先すべきことがとかれているのである。第二は，入社式のような役割交替期の通過儀礼において，呪術・激励・暗示・脅迫その他象徴的手法によって，役割分限への自己同化を青年に動機づけ，強化する。第三は，若者文化のなかに，青年の欲求不満を昇華・代償・発散させるような様式のものがもうけられていることである。たとえば，限定された機会にだけ，娯楽や性の爆発的解放を準公認したり，あるいは青年役割行為の業績，たとえば勇気・胆力・体力の卓越を共同体をあげて賞讃・顕彰する工夫などがある。第四に，青年役割と成人役割とが内容的に非連続であっても，青年ステップのつぎの段階たる成人期における権利や利益がとおからぬ将来に予約されており，人生進行のステップとしては順調や円滑が保証されている。中世ギルドにおける徒弟・職人と親方の関係のほか，この種の例は伝統主義の社会ではすくなしとしない。以上であきらかなように，青年役割文化においては，ミードやベネディクトの概念をつかうならば，文化習得の非連続性，青年性や世代関係の緊張をともなっているのであるが，それにもかかわらず，社会構造への整合が保障され，また青年の人生段階進行の円滑がうしなわれていない。社会化過程の非連続は，ただちに世代間の社会的葛藤として顕在化するとはかぎらない。ただし，世代間の緊張を中和させるような，青年役割文化にまつわる社会的機制がうしなわれるばあいには，青年期の混乱・困難は一挙に

12) 大日本青年団：若者制度の研究，慶応書房，1936は多数の定目事例を収集記載している。

増大し，また世代関係には顕在的な社会的葛藤があらわれるであろう。それが近代社会の問題であるし，そこに発生する別種の青年文化が後節の問題なのである。

つぎに，補足的な問題の第三にうつる。それは，青年役割文化の対社会的機能は，基本的には保守的であることを先述したのであるが，はたして青年の自発的なエネルギーが発揮される余地はなかったのであろうか，という疑問である。青年役割は，総体社会の文化体系のなかにがっちりとくみこまれて，まったくうごきのとれないものであったろうか。
この辺の消息は，前近代社会の青年集団を仔細にしらべるとき，ある程度の解答がえられよう。青年が家族からときはなたれ，公的秩序の構成単位としての年令集団にくみこまれたとしても，それが青年の集団としての単位であるかぎり，共同体や成人の世界から相対的にはなれた独立の側面があるはずである。100% 共同体の召しつかいや奴隷におわったとはかんがえられない。かぎられた程度のものであろうが，なにほどかの主体性・自発性・創造性という意味での「若者らしさ」の世界があったはずである。

この問題に関連して，社会人類学者ガリバー（P.H. Galliver）の指摘は示唆にとんでいる。かれのいうところによると[13]，青年集団をふくめ，一般に年令集団は，家族制優越の社会では勿論形成されないが，他方，社会が発展して独裁制・君主制・貴族制など階級組織と強力な権力機構ができあがったところでも，あらわれにくい。それは，なにほどかの程度の原始的な民主的関係があるばあいにのみ出現する，といっている。青年集団に即していうならば，青年たちの自主・自立や主体的エネルギーの表現がありうるわけである。年令集団論の元祖シュルツ[14]も，この点をみのがしておらず，氏族社会のとざされた家族制度的停滞を打開するために，家族からはなれ，能力によって，あたらしい文化を創造する平等な権利をもつところの青年集団が必要であったことを論証し，その集団が男性社会のリーダーをつくりだし，家族的結合の枠をこえた横の連帯を構築する基盤となったことを，おおくの例をあげながら説明している。わがくに若者組生活についての風俗資料[15]も，性・婚姻・祭礼・娯楽・警備などの分野で，青年集団がかなりの自治と主体的貢献をおこなっている証拠を提出している。

青年役割文化は，基本的には体制維持の保守的な機能をもつが，青年期エネルギーに対する評価がなかったわけではない。最低のばあいでも，青年による社会の秩序や文化の更新や新生が期待され，さらに青年集団が結成されているばあいには，かれらがある程度，自主独立に行動し，既存の文化の枠からはみでることが社会的に公認され，成人の社会ならばゆる

13) Galliver, P.H.: Age Differentiation, in International Encyclopedia of the Social Sciences, Vol. 1, ed. by D.H. Sills, 1968, pp. 157–162.
14) Schurz, H.: Alterklassen und Männerbünde, Georg Reimer, 1902, SS. 65–82, SS. 88–89.
15) たとえば，中山太郎：前掲書，大日本連合青年団：前掲書

されないことも，「青年だから」黙認され，成人はみずから手をくだしにくい若干の改良や文化の創造を，青年に託すということがあったのである。青年役割文化には，かような自由の側面が，かぎられた程度ながら，ふくまれていることを評価すべきであろう。

最後，第四の補足事項は近代社会における青年役割文化への認識である。それはたしかに前近代におけるものを典型とするのであるが，内容をかえながらも，近代社会にはたらきつづけているとすべきである。家族その他の生活場面において，「子どもらしさ」という役割期待とともに，「青年らしさ」という観念が，たとい，その輪郭がぼやけ，内容が区々になり，動揺しつつあるにしても，青年のありかたに対する規範意識として社会心理レベルで通用し，それに対する青年の側の役割取得学習がおこなわれているかぎり，青年役割文化は消失していないのである。しかし，生活慣行のなかにおける，かようなインフォーマルなものよりも，現代を特徴づけるような明確な制度的次元の，あたらしい青年役割文化が，ここ150年のあいだに発達してきた。前近代社会における身分制職業集団や，農村的ムラ共同体を基盤とした制度的な青年集団と，それとむすびついた青年役割文化はもはや崩壊してしまったけれども，前近代的な社会とはことなった基盤が発達し，あらたに現代風の青年役割文化を形成している。その基盤とは，共同体（Gemeinschaft）にあらざる派生的な機能集団，または利益社会（Gesellschaft）であって，しかもそれらははなはだ強大かつ強力である。

その，もっとも代表的なものが，制度的教育形態としての学校社会と，近代産業における企業体であり，これらは未曽有の規模において青年層を吸収している。これらはまた，社会学的な意味での官僚制的・管理的な組織社会であって，そのシステムの下位単位として「生徒・学生」とか「若年労働者」という役割期待が設定されており，特に前者の学校社会においては，企業体における以上に，青年に対するこい濃度の期待がさしむけられ，教育の名のもとに青年性を限定してきたのであった。学校教育の普及が青年層をもとりこむようになった今日，さまざまの混乱や問題をふくみながらも，「生徒・学生」としての役割は，現代青年の社会化過程を通じてかなり優勢な規定力をもっている。「労働から解放されたもの」，「実生活参加を留保されたもの」，「勉強すべきもの」という社会的モラトリアム（支払猶予期間）にある客観的性格，およびその基盤のうえに形成された青年の規範的・社会心理的イメージは，現代青年心理学の記述するところのさまざまの青年期心性を形成し，現代的な制度的次元の青年役割文化をつくっている。これらの事象は，いわゆる学校文化の一環として，その検討を学校社会学的研究にゆだねられるべきであろう。

第7節　青年局在文化

本節において，青年文化の二番目の類型として，筆者が「青年局在文化」と呼称するところのものを提唱する。局在とは局所に存在するという意であって，青年集団が社会のなかで孤島のように局在し，成人社会から相対的に遊離しており，直接の干与・統制をうけることなく，自発性と自由において行動し，かような集団生活を基盤として，青年成員だけに通用し，かつ成人文化とは相対的に無関係で異質的な文化が形成されているばあいを指摘したいのである。

前第6節でとりあげた青年役割文化と比較するならば，これはまったく対照的な性格をもつ。前者（青年役割文化）は社会的な役割期待への反応型であって，発生の事情には外因性が濃厚であるが，後者（青年局在文化）は青年自体によってつくられるという内因性がつよい。前者は役割体系という総体に対して整合し，成人により支持・承認をうけたものであるが，後者はそのような積極的な認証をえたものでなく，また役割体系とは関係がきれており，孤立した独自性をしめし，成人との世代関係に亀裂ができはじめた初期兆候といえる。前者をささえる青年集団は共同体の総構造や全体制に有機的な部分として編入されているが，後者を産出する青年集団はまさに局在的であって，社会のなかにありながら浮遊する存在である。前者では，社会の安定・統合・伝統の保持に貢献するという機能が明確であるが，後者では，その点は不明確であり，せいぜい社会内部の多様性や異質性を表現する存在としての価値にとどまる。前者は青年の人生にとって，着実で円滑な進行を保証するステップとしての意義をもつが，後者は単独ではその点が不明確であり，有意義・無意義両方の可能性をはらむ。前者は，社会文化によって枠づけられ，制約されているという限界をもつが，後者では閉鎖的な青年集団内部に関するかぎり，青年エネルギーは発散され，自由と創意・自主性がみとめられる。そして最後に，青年社会学の視座からいっても，また，本節の所論としても，もっとも重視したいことは，前者は社会史上，青年期カテゴリーおよびそれにともなう青年役割という社会的表象の存続するかぎり，今日にいたるまできわめて普遍的にあらわれた原型的青年文化であって，ことに静的な前近代社会に支配的であったのであるが，後者は動的な近代社会での特殊な条件を酵母として形成されたものであって，青年史上の新型であり現代青年型を特徴づける要因の一つであるという点である。

青年局在文化は，成人の眼をのがれ，成人による統制をうけず，青年だけによって自由に結成された局在集団の存在を前提とする。もとより，前近代的社会においても，気ごころのしれた青年たちだけによるインフォーマルな同輩集団は，人情の自然として，いくらでも形成されてきたであろうが，近代社会におけるインフォーマルな「局在性の青年集団」（以下

慣用にしたがい，同輩集団とか友人集団とよびかえることもある）は，その発生機序が歴史的に特殊であり，また，その多発性の点で格段の相違がみられる。

そこで，本節での基本問題の第一として，局在的な青年集団の発生を検討すると，おおまかには，急性社会変動・社会解体・都市化・流動化を誘因とみることができる。たとえば，未成年者にとって基本的な社会化の場である家族は，制度的なものから心情的なものへと変化しつつ，青年への拘束力が弱化し，青年が依存・準拠する拠点となりえなくなり，さらには社会移動の流動化が背景となって，青年が家族から離脱する自立傾向をよしとするエートスが形成される。このように青年期における家族からの半脱出が増大する他方で，青年を伝統的にささえてきた地域共同体の方も弛緩・崩壊してゆく。もはや昔日のムラ秩序に埋没して安定することは困難になり，青年は人間関係的粘着性のとぼしい都市・大衆社会に浮遊するようになる。かように，家族や地域社会という第一次集団の機能が減退し，心理的・社会的未成熟の段階にある青年に必要な支えが動揺するところから，その代替[1]を同輩集団にもとめ，いわゆる第三の空間に無数の不定型青年集団が発生することになる。かように，前近代と近代とでは，これら局在的な集団の背景がまったくことなるのであって，前近代では粘着性のつよいムラ共同体や身分社会がひかえていたのであるが，近代社会では，青年たちは見とおしのつかないほどの大衆社会へおしだされ，あるいはそのなかにとびこみ，そのなかで，浮ドックのような同輩集団を結成せざるをえないのである。

成人の統制からはなれた友人集団が多発する事情には，青年に対する第一次集団の機能減退と呼応して，別種の社会的誘因がはたらいている。すでに第1節「青年問題への視角」で，近代社会では未曽有の量と規模とをもって，青年という同年齢層の集合化と組織化とがおこなわれていることを指摘した。おもうに，産業革命以後に発達した巨大な双生児の社会的装置があって，大量の青年層を吸収しつつある。いうまでもなく，普及しつつある学校教育と青年労働力に依存する企業とである。これらは青年層を管理する近代組織なのであるが，かような制度的統制下におかれた集団生活の次元を「オモテ」集団とするならば，それが機縁となって，制度的生活の裏面にインフォーマルな「ウラ集団」としての青年仲間が結成される[2]。そのばあい，おなじ発達段階にある世代の心情的共鳴から，たまたま青年たちの結集が自然に進行することもあるし，制度的管理からくる硬質の役割賦与からのがれ，統制的組織の裏面に軟質のあそび集団をつくって，バランスをとろうとすることもあろう。あるいはさらに，抑圧や不安定を解消するためにカタルシスをもとめ，治療集団的な仲間づくりがおこなわれるなど，集団結成の社会心理的機制にはすこしづつ相違したニュアンスがみとめられる。

1) Turner, R.H.: The Social Context of Ambition, Chandler Publishing Co., 1964, pp. 138–46.
ターナーは若者の同輩集団を拡大された(extended)第一次集団とよんでいる。
2) Waller, W.: The Sociology of Teaching, Russell & Russell, Inc., 1932, Chapter 9, 10 and 12.

ともあれ，友人集団が結成され，そこでの生活が継続するときに，青年メンバーだけに通用する共通の意識と行動の様式がうまれてくるのは自然のなりゆきである。もとより，青年集団が局在的であるとしても，それは総体社会のなかの存在であるから，総体文化における普遍的特性を共有することはまぬがれないが，他方，局在した集団生活にだけ通用する特定の文化様式も発生するのであって，その側面を「青年局在文化」と名づける次第である。また十代文化（Teen-age culture），若者下位文化（Youth subculture）とか学園文化（Campus culture）など，さまざまの呼称をうけるばあいもある。そこで，本節第二の問題として，かような青年文化の内容上の特性にふれなければならない。それは同時に，現代青年性の集合的次元での特徴をしめすことにもなる。

生活の内容分野に即してみたとき，青年局在文化では，服装・歌謡のような感性的・表出的なもの，言語・交際・性愛のような対人的次元のもの，あそび・スポーツなどの余暇活動に類するものが主要な領域[3]をしめている。欧米やわが国では，これらの新奇さと多様さについて，研究者の調査により，あるいはジャーナリストの観察を通じておこなわれてきた報告はすくなしとしない。しかし，それらのいちいちの記述より重要なことは，機能面での特徴である。一見して察知できるように青年局在文化として生成された様式は，政治・経済・労働・生産などの，人生や社会にとって現実的・中核的な重みをもった分野からはなれた風俗的な外見か余暇的・消費的な分野に関するものである。この点は局在文化のにない手たる青年たちの客観的背景に起因する。たとえば，制度的な学校生活を機縁として，そのかげに「ウラ文化」を形成させた生徒・学生の大群は，近代産業社会の高度な生産性と経済発展にささえられて，十歳代後期の年齢に達しても，学校教育の恩恵に浴する人口群であり，反面「労働から解放された」依存者・消費者であるからである。また，いわゆる勤労青年のばあいでも，かれらのサークルやグループは，企業での「労働における疎外」に対する補償として結成される側面があり，余暇や娯楽によって解放をもとめる傾向が動因となっている。かように，青年局在文化は成人社会から遊離したインフォーマルな友人集団という園に，ひそかにさいた花ではあるが，生活領域のなかでは浮遊性・皮相性のかるい内容を特徴としているし，そのことが現代青年性の一面を規定している。

そのほか，青年局在文化の内容を，価値観や規範という内面的な次元についてみるならば，いくつかの特徴をあげることができる。(1)一般に局在性の小集団は外部に対して閉鎖的・排他的であり，逆に内部メンバー相互のあいだでは情緒的な凝集性がたかい。くわえて，青年局在集団のばあいには，第一次集団の代替機能が期待されているところから，集団への

3) Smith, E.A.: American Youth Culture, The Free Press of Glencoe, 1962, pp. 11–15, pp. 107–206.
Sebald, H.: Adolescence, A Sociological Analysis, Appleton-Century-Crofts, 1968, pp. 218–262.

帰属志向・同調・同一化が強迫的といってよいほど強度であることが[4]しばしばである。服装・言語などの外面的な独特さに青年が執着するばあい，それは集団への同調心理のシンボリックな表現であることがおおい。(2)また，外部に対しても閉鎖的であって，成人の眼にさらされたり，成人の触手が侵入するのを忌避する態度は，集団行動における自由と自己決定が中核的な規範となっているという反面をしめす。(3)さらに，総体社会の諸現実の制約から遊離した集団生活は，青年の人生経験のとぼしさとあいまって，青年文化にロマンティシズムとその対極の感性主義とを同時に特徴づける。(4)なお，青年局在文化にいちじるしいのは無責任志向[5]という点である。成人の役割において支配的な型のひとつは責任という徳性であるが，青年集団においては，「たのしく，気楽にすごす」という型に価値がおかれがちである。ただし，この傾向が，成人の期待や権威に対する反抗とか，体制内の諸責任の拒否という心理に濃厚に根ざすようなばあい，それは局在文化という類型では律しがたく，次節でとりあげる別タイプの青年文化として理解するのがよいであろう。

青年局在文化における規範の側面を検討したからには，第三の問題として，その青年文化がはたす機能上の特性をとりあつかわなければならない。まず，青年自身の発達過程における効果については，友人集団の形成動因が，青年の心理的・社会的必要性に根ざす度合いがつよいほど，影響力がおおきいとかんがえられる。一般には積極と消極との両面の評価がなりたちうるであろう。プラスの効果をのべる説は，T・パーソンズをはじめ，おおくの研究者ののべるところであって，一方に家庭，他方に巨大・複雑な現代の第二次集団という社会環境があって，社会的参加・適応という観点からすれば，青年期は前者から後者へと移行する時期なのであるが，一挙に第二次集団に進出することは青年に混乱・困難をあたえるところから，青年文化は，青年が家族から脱出するばあいの「飛び台」(Springboard) の役割をはたし，または，両次元の社会のあいだで青年の移行がすすむばあいのクッションとか，中間ステップとして機能するとかんがえられる。産業社会・大衆社会など巨大な環境に対して青年を防衛する役割をはたしつつ，同時にきたるべき成人性を獲得できるよう準備をあたえるとするのである。つまり，発達過程における通過経験としての教育的意義をたかく評価する見解である。

しかし，前節で解明したような青年役割文化が，総体社会との関係で整合性を保持していたのに比較するならば，現代社会の青年局在文化が青年の発達過程にはたす機能には，あまり積極的・楽観的に評価できないものがあり，すくなくとも漠然とした効果であるようにおもわれる。いわば消極的評価の見解もありうるのではなかろうか。このような私見に類似し

4) Smith, E.A.: op. cit. pp. 9–11.
5) Parsons, T.: Age and Sex in the Social Structure of the United States, American Sociological Review, Vol. 7, No. 5 (October 1942), p. 606.

た説の一つにR.H.ターナー[6](Turner)の見解がある。かれは，筆者のいう青年局在文化にあたるものを青年下位文化（Youth subculture）とよんでいるのであるが，その独特さを厳密に審査してみると，充実した顕著なものだとはいえないという。おもい文化というよりはかるい文化であって，真実の下位文化（この概念の検討はのちにふれる）とまでなっていない。なぜならば，包括的な生活様式というよりは部分的・断片的であって，青年たちは仲間集団のほかに，依然として家族やその他の集団に基本的な生活と価値観を依拠しつづけている。そして青年文化は，生活での重要な側面というよりは，おもにあそびの分野に関係しており，集団生活での連帯性や同一化なども，どちらかといえば情緒的，儀礼的（ritualistic）であって，真に内的な確信や規範意識を深化定着させるとはかぎらない，という。つまり，ターナーのばあいは，青年局在文化に関するかぎり，その存在価値をみとめているけれども，青年の発達における社会化の独自な効果を強調するたちばをとっていない。

同様に，S.N.アイゼンシュタット[7](Eisenstadt)も現代の自然発生的な青年集団とその文化について，かならずしも，楽観的に評価はしていないのであって，その人間形成機能は制限されたものであると指摘している。かれの見解は広範な比較文化的青年研究から帰結されたものだが，かれは一方では，現代青年の友人集団における自由・自律および自我発達は社会力学的に必然現象であり，かつ評価さるべき特徴であるとみとめながら，他方では，たとえば青年役割文化にくらべれば，青年局在文化は総体社会に有機的に接合しておらず，浮遊した性格であり，また，その集団での経験内容は，現代社会において青年に期待される主要な発達課題をひきうけるには，かたよっており，貧困である，としている。以上，現代青年の発達過程に対する青年局在文化の機能について，積極・消極両種の評価を検討してきたのであるが，すくなくとも，青年の適応力を増強させるという形式的有効性の点では，青年役割文化におとるといえよう。その原因は，既述したような，青年局在文化のそもそもの発生の経緯をふりかえってみればおのずからあきらかである。そして，青年が成人するにつれ，総体社会での遊離や局在がゆるされなくなり，現実的な社会的必要に適応する心的体制を習得するようになったとき，友人集団独特の服装・言語やシンボリックな集団同調性も消失してしまい，わかき時代の一過性の出来ごととして記憶にのこるにとどまる。すなわち，結果的には青年局在文化は「泡沫文化」としての性格も否定できないようである。また，青年局在文化が青年の社会的人生における後続発達——特に重大な価値観の内面化と第二次集団への確乎とした対応態度の形成に影響することがあるとすれば，それは局在した閉鎖的な青年集団生活が単独に効果を発揮できるのではなくて，他種の社会的条件と結合したときに可能

6) Turner, R.H.: op. cit. pp. 143–145.
7) Eisenstadt, S.N.: From Generation to Generation, The Free Press of Glencoe, 1956, pp. 181–3.

であるとおもわれる。

本節における基本的な問題の第四として，青年局在文化がひきおこしうる客観的な対社会的な機能の検討にうつる。端的にいって，青年の局在文化は，その名があらわすように総体社会との関係では，文化体系にくりこまれることなく，遊離した異質性をしめすにすぎない。そこで，成人社会にとっては，「若者たちが勝手につくりあげ，かれらだけに通用するなにものかがある」という程度の隔離認知にとどまり，なにほどかの違和や世代間緊張を潜在させるかもしれないが，葛藤や不整合が顕在化することはない。青年局在文化単独では，変動や創造的変革を惹起するほどの対社会の衝撃力がなく，近代社会での多元性現象として放置され，成人文化とのあいだに接触のとぼしい併存がつづく程度であろう。そして，むしろ，それが社会的レベルでは無害無益であり，個人レベルでは発達過程における一過性の泡沫効果のものだとするならば，多元社会のなかでも体制支配の重心はやはり存在するのであるから，結局はその引力圏にすいよせられ，順体制の社会的適応状態へと変容・消滅するという見方もなりたつとおもう。

筆者の接近法とは同一ではないが，青年（局在）文化の社会的順機能性をとくものにT.パーソンズの説がある。かれのいうところによると[8]，青年文化は社会体系のなかの一つの重要な安全弁であって，成人世代との関係における青年層の緊張や歪みを解放するはけ口として機能する。それはかなり許容的な特色をもち，青年たちの意識や行動に逸脱があるばあいでも，そのエネルギーを吸収し，結局，全体社会の均衡を維持するところの社会統制の二次的制度であるという。このパーソンズ流の機能主義的均衡理論の枠内で，青年文化の問題が解明しつくされるかどうかは疑問である。青年局在文化の発生メカニズムには，社会的「不均衡」がはたらくことはたしかであるが，そのアウトプットにおいて，直截に社会的な均衡保持に貢献するかは単純にはいえない。まして，かれは青年文化における逸脱性の面にも言及しているのであるが，そのばあいには，すべての社会的矛盾がそうであるように，要因間の力学には迂余曲折があり，弁証法的な変動理論も必要になるかもしれない。次節「青年逸脱文化」での問題である。

以上，基本的な検討事項の第三と第四とにおいて，青年局在文化の対個人・対社会の機能を論じたが，ここで，青年文化における「心理的・主観的動因があらわす意義」と「客観的な機能」とを区別しておきたい。というのは，青年文化の「機能」については積極・消極両様の評価がありうるとしつつも，私見としては消極にかたむいた説明をおこなった。しかし，それは，青年局在文化が形成される際の動因の「意義」を軽視することにはならない。青年局在文化は，青年の発達に対しても，社会自身にとっても，それほど甚大な客観的影響

8) Parsons, T.: The Social System, The Free Press of Glencoe, 1951, pp. 305–306.

をあたえないかもしれないが，それが発生し，存在するという事態は大層問題的な意義を表明しているとおもわれる。

まず，社会的次元での意義を了解してみるならば，優勢な青年役割文化をつくりだしていた時代とはことなって，現代社会は青年に安定した位置と円滑な人生進行を保証することができなくなり，そのような青年待遇の失敗に応じて，必然的に青年局在集団とその文化が自生してきたのだといえよう。心理的・社会的に未成熟な青年をささえ，その発達を誘導するうえで基礎的な役割をはたすべき社会集団や機関が，それぞれに機能不全となり，あるいは相互に有機的な調整がつかなくなったということが，青年局在文化の出現によって表明されている。つまり，急性変動の現代産業社会において，社会体系が弛緩し，共同体の凝集性が稀薄化し，社会的諸部分の分散・多様・不整合・亀裂が発生しはじめるというような，総体社会の近代化現象の一端が，青年期における局在文化によってしめされているのである。近代化においては，一方では前近代的な共同体とことなった性格の統制機構たる巨大組織に諸個人が編入・管理されてゆくのであるが，他方では，それからはみだしたところで，アトム化した諸個人からなる大衆社会の大海が出現する。もとより，青年局在文化は後者における現象であって，その大海に浮遊する小結晶なのである。

つぎに青年自身に視点をむけるならば，局在文化における青年は，社会から「ほおりだされつつある」存在といってよいであろう。前述のような近代社会の変動のもとで，青年に対する全体としての保護・誘導の装置が機能不全になるとき，いまだ脆弱で過敏な青年は，なんとしても不安定からぬけだそうとする。これは，現代における人間の必然であり，必要である。かように，おかれている不安定な客観状況のもとで，青年が安定をもとめ，自己確認（Identity）を成就しようとするいとなみこそ局在的な青年文化のあらわす意義でなかろうか。

また，それは青年エネルギーの表現であり，社会からの解放，自由への志向を予約するかのようにみえる。青年史のうえでは，青年局在文化は，青年解放と自由とを社会的規模であらわした最初であろう。しかし「からの自由」はかならずしも「への自由」を保証しないし，疎外からうまれたものは，自己のなかに疎外をふくむがゆえに疎外を克服することはできない。青年局在文化は，現代社会状況のもとにおける青年のエネルギー表現であり，自己確認の営為という「意義」があるにしても，その成立発生の基盤と経過の条件に制約されて，その「客観的機能」に関しては，かならずしも生産的な効果は先ゆき不明であり，エネルギーの空転ということがありうるのである。現代青年の自由には，光とともに陰影のともなうことに注意したい。T. パーソンズが青年文化について，第二次集団や全体社会に青年を積極的に適応させる準備段階であり，中間ステップとして効果的であるとし，究極は，社会の均衡を恢復保持するための統制機能をもつという風に，順機能性を楽観していたことは先述した

とおりであるが，すくなくとも，本節で解明した自閉的な青年「局在文化」は，パーソンズ説だけでは処理しつくしえない問題をはらんでいるとおもう。

第8節　青年逸脱文化

青年文化の第三の類型として逸脱文化[1]とよぶものを設定し，本節において考察する。ここでいう逸脱とは善悪良否の価値判断には拘束されない概念である。それは，社会における支配的な価値体系からは逸脱しており，既存文化の体現保持者である成人層とは葛藤関係にある青年群の生活様式をさす。すでに第6節において，青年の社会史を通じて普遍的に観察されうる青年役割文化についてのべ，それとは一線を画して異質であるところの，近代社会に特徴的な青年局在文化のことを第7節に考察した。本節での青年逸脱文化は青年役割文化とは断絶しているけれども，青年局在文化とくらべるならば，近代社会での特異現象として同類であり，むしろその延長線上に増強された性格のものである。局在性のなかに，すでに逸脱性の種子が胚胎しているものだからである。また，ひとびとの注目をひきやすい現代青年性の一部に，無責任・反抗とか自主性・創造性がみとめられるのであるが，それらを社会的次元で一括するとき，青年逸脱文化としてとらえることができよう。

その発生および機能の考察にさきだって，蛇足ながら，青年文化と関係のふかいサブカルチャー (Subculture) ということの検討を挿入しておこう。というのは英米，特に米国の青年研究者[2]はほとんどがこのんでこの概念を使用する。下位文化ないし副次文化とでも訳すべきであろうか。しかし，小論においては，青年下位文化という用語の採用をわざとさけてきた。そういう意図をもつようになったのは，青年逸脱性に関する研究者には比較的しられている J.M. イーンジャー (Yinger[3]) の論文から示唆をうけてであった。また同時に，筆者が自己流に青年文化に三つの下位型を設定したのも，その論文からの刺戟にのうところがある。かれは，最近さかんになってきた青年研究のおおくにおいて，現代社会での青年文化が，なんでも青年下位文化 (Youth Subculture) とよばれる傾向に対して，社会科学における用具概念の正確さを重視するたちばから，その内容が多義かつ曖昧であるとして批判的な

1) 既出の青年役割文化，青年局在文化とをふくめて，青年文化のなかの三類型のスケッチは，すでに「教育と医学，1968年8月号，pp. 2—3」において，「若者文化への視角」として発表した。
2) Kandel, D.B. et al.: The Concept of Adolescent Subculture, in Adolescents and American High School, ed. by R.F. Purnell, Holt Rinehart and Winston, Inc., 1970, pp. 194–205.
Gottlieb, D. and J. Reeves: Some Comments on Adolescent Subcultures, in their "Adolescent Behavior in Urban areas", The Free Press of Glencoe, 1963, pp. 60–75.
3) Yinger, J.M.: Contraculture and Subculture, American Sociological Review, Vol. 25, No. 5, (October 1960), pp. 626–628.

整理をこころみている。

私見によれば，下位文化という文化人類学上の概念が今日の社会的・心理的研究に採用されるようになったのは，文化体系内において多様性・異質性や分裂がいちじるしくなってきたという現代社会状況に対応したものとおもわれる。ともあれ，下位文化とは総体社会のなかでの一部のひとびとや部分的な集団に，相対的に独特な生活様式や規範がもたれているのをさすようであるが，イーンジャーは，かような一般規定は不十分であって，部分的文化の発生・起源とか，社会との関係，対社会的機能などの点から検討のしなおしをする必要があるとしている。かれは第一に，下位文化と役割（role）とを混同すべきでないという。社会がその構成員を分化させ，それぞれの地位にことなった権利・義務を配当するばあいに役割が成立するのであるが，それは統合された文化体系の部分なのであって，全メンバーによってしられ，また支持・承認されている，とする。小論では，青年のばあい，これに該当するものを青年役割文化（第6節）としたわけである。

これに対してのイーンジャーは第二に，ただしい意味での下位文化は異質的構成をもつ社会の部分に関する現象だとする。それは全体社会の文化体系とは遊離した文化であって，大社会内の小社会が物理的・社会的に孤立するところに形成される。全体社会の支配的な文化とはことなった言語・価値・宗教・食物・生活のスタイル等をもった小数民族の文化がその例である。かれによると，青年文化には下位文化としてよい側面がある。なぜならば，青年層の規範体系には，全体社会とは関係がうすく，成人層には未知であり，もっぱら青年集団のなかだけで学習され，通用するものがあるからである。小論の第7節で考察した青年局在文化は，イーンジャーの規定による下位文化にほぼ該当するといえよう。それにもかかわらず，小論では，青年文化の第二型を青年下位文化とはしなかった。その理由は，R.ターナー（Turner）が，青年下位文化は真の（true）下位文化とはすこしことなっているという疑問をなげかけたばあい[4]と同一である。かれは，青年下位文化は断片的・部分的（segmental）であって，青年の生活をとりこんでしまうような，真の下位文化のばあいの包括性（Comprehensiveness）が欠如している。青年下位文化における規範システムは，居留地におけるインディアン，ゲットーのユダヤ人社会ほど包括的ではない。青年の同輩集団（peer group）が青年にとって最強の準拠集団（reference group）としても機能するばあいもしばしばみられるけれども，一般的には，青年集団は青年にとって家族その他の集団とともに同時的に帰属している集団の一つにすぎないのである。

ともあれイーンジャーは第三に，下位文化と区別して反文化（Contraculture）という概念を提起する。それはむしろ，下位文化から分節発展したものとみるのがよいかもしれない。

---

4) Turner, R.H.: The Social Context of Ambition, Chandler Publishing Co., 1964, pp. 143–5.

もともと下位文化は全体社会に対する異質性を保持し，その意味で全体文化とは潜在的に緊張関係にある。ただ，その異質性は全体社会をおびやかさない程度に温存されつづけている不活性文化である。それがすこしでも活性をおび，エネルギーが増大すると，社会の支配的文化型と対立・葛藤をひきおこすところの反文化として顕在化する。反文化をささえるものは，全体社会と対立・反抗の関係になった部分集団 (sub-group) なのであるが，そのような集団と文化の発生を，イーンジャーは社会心理学的次元の条件によって説明する。すなわち，下位文化は部分集団のメンバーの共存と相互作用という事態だけで産出されるのであるが，反文化のばあいは，部分集団の成員が外部の総体社会との関係において，欲求不満・不安・役割不明確・抑圧などの葛藤体験をもち，それへの集団的反応として，外部の支配的価値・規範を拒否し，反逆するところに発生する。そして，この反文化の典型に現代青年文化の一側面が該当するという。本節で筆者が青年逸脱文化として考察するタイプのものは，まさにイーンジャーの反文化にあたるものである。ただし，その力動的性格をややくわしく吟味してみたとき，さらに下位類型の分節が必要におもわれ，イーンジャーとは同概念を使用しなかったのである。

イーンジャーの区別した下位文化と反文化との対比は，小論における局在文化と逸脱文化との対比に通じる。青年の局在文化と逸脱文化とは，現代の変動的な異質構成の社会を基盤として発生した歴史的新種であり，総体社会のなかにありながら，それから遊離し，成人世代とのあいだに亀裂を生じた青年集団の産出したものという点で，両者とも同種同根である。しかし，力動性の点では，相対的ながら，両者には相違がある。発生論的には成人の規範や統制から遊離する際に，局在文化の方は，社会解体などによっておのずから放出された結果というおもむきがあるが，逸脱文化の方は，成人規範に対して反発・逸脱するという点で，エネルギーが大である。機能論的には，青年自身に対する面では，局在文化が象徴的で微温な代償・補償の行為とみなされるが，逸脱文化の方は自我実現・自己確認の志向が熾烈である。また，社会に対する機能の点では，局在文化は自閉的な不明確さをしめし，結果として体制に吸収されてしまうことがおおいが，逸脱文化の方は攻撃的な拒否反応があって，脱体制のうごきとなり，ときにより総体社会を動揺させ，あるいは変動の起爆薬となりうる。

要するに青年逸脱文化は，既存の価値体系や役割構造に対して異質・不整合であり，それを身につけた青年たちは，成人のつくった路線を踏襲する後継者でなくなる。青年は既成秩序と成人世代への不服従・挑戦・反逆をくわだて，現状況のもとでのかれらなりの自己主張をおこない，成人の眼には「理解しにくい」，「けしからぬ」存在に映ずる。今日のいわゆる青年文化の概念やそれへの関心の背景には，かような逸脱性への限定された問題意識があるわけである。かような青年逸脱文化は青年と社会，青年と成人との葛藤の結果，反動形成的

に産出されたものであるが，現代社会において，なにゆえにそのような対立・葛藤の事態がおこるのであろうか。その発生に関する病因論（Etiology）から考察しよう。

問題的条件は，前第7節でのべた局在的な青年の集団と文化にすでに伏在している。青年生活の基盤となっている社会的構成要素の弛緩と機能不全により，青年が安定した座席をあたえられなくなり，青年の円滑な人生進行がみだされるばあいに，成人社会からはみだしたところで，青年の局在集団がくまれ，局在文化が形成されるのであるが，しかし，基本的には，青年は社会から絶対的に遊離することはできない。社会体制のなかで成人世代との接触・共存の局面をもつのが常態である。そのような接触の局面において，青年が主体性をあらわそうとし，生きがいをもとめるばあい，社会体制によって青年エネルギーが空転させられ，不安定な拡散・彷徨をうみ，さらには挫折させられるような機会は，現代青年の人生進行の道すじには山積している。おもうに，青年期の乱調は近代社会の誕生とともにはじまったのであるが，第一次大戦後の1920年代には質量ともに明確化し，さらに第二次大戦後の1940年代以降では，欧米やわが国をはじめ世界的規模において広範かつ急速に増大蔓延するようになった。特に資本主義的高度産業社会では，外見上のゆたかさの達成にもかかわらず，青年問題はまさに普遍的・不可避の観を呈している。かような状況の解析は，青年問題の社会因研究[5]として詳察を必要とするであろうが，以下では顕著な条件を要約してとりあげるにとどめる。

既述の第5節「社会的所産としての青年期」において，青年期は二重の意味で社会的所産であることを論述したあとで，現代の青年文化に表現されている特殊な青年性の形成条件を説明するのに，青年期長期化説という一般理論があることに言及した。文化の複雑高度な近代社会では，過渡・移行期としての青年期が長期になり，そこに不安定・不適応・逸脱が発生するという論である。おもうにこの論は，青年問題にとって背景や誘因として理解できるが，直接的な関連や動因としては説明不十分である。青年期長期化を下地として，それに社会・文化的な他の中間的媒介要因が加重され，はじめて青年期進行の変調があらわれると解すべきであろう。現代的青年性は三重の意味で社会的所産なのである。

以下，青年の社会的不整合を顕在化させる動因をあげてみよう。①青年期の発達課題は成人性基準と表裏関係にあるのだが，その基準が高度化するとき，学習のための努力と緊張が連続して青年にしいられ，挫折や停滞の可能性がふえ，②成人役割の内容が拡大・複雑化するだけでなく，社会変動にともなって成人基準自体も変化するところから，青年にとっての達成基準が漠然とした遠景になり，進路選択や進行に混迷がおこる。未来が不可視であることは，青年のエネルギーを焦点づけることをむずかしくし，そこに不安定を惹起する。③近

5）二関隆美：青少年問題，教育経営事典第4巻，帝国地方行政学会，1974，pp. 110～114.

代社会における自由・解放・流動の原理は，代償として青年に不安と緊張を経験させる。たとえば，家庭から離脱する時期の青年は，同時に，職業や階層の点で社会移動の始発期にあたり，適応・競争・上昇のための慢性緊張におちいる。さらに，近代社会での欲望解放のエートスのもとでそだった青年は，欲求水準が自由かつ高度なのであるが，生活での客観的条件はつねに遅滞しているのが現実であるから，欲望と現実とのギャップはかえって拡大し，青年は欲求不満や挫折感をふかくする。④急性の社会変動のゆえに，普遍的な価値体系や役割体系が弛緩し，脆弱になり，いわゆるアノミー状況に類似してゆくなかで，青年役割は甚大な影響をうける。青年役割文化が強固な体制では，青年のものと他世代役割とは整合関係にあり，潜在的な緊張や敵対を抑圧・中和する機序がそなわっていたのであるが（第6節「青年役割文化」），全体系がゆらぐような状況では，対立は表面化し，社会的葛藤に転じる。成人権威の失墜，青年の反抗はまさに変動社会における必然である。このことはさらに，青年役割そのものの混乱・矛盾や曖昧さの事態へとすすむのであって，青年は伝統や因襲からの解放を獲得する反面で，自身の位置やすすむべき方向やステップの不明確のゆえに，不安定をも入手せざるをえないのである。⑤国内的・国際的な社会不安に対し，青年は鋭敏な触覚と過敏な反応をしめし，危機・焦燥・閉塞の意識が内攻する。既成秩序や伝統的価値に対して敵対・批判する新価値観が，社会内の矛盾状態から発生するばあい，青年は因襲による汚染のすくない周辺人としての素因のゆえに，批判勢力に急速に吸収され，焦燥感はさらにふくれあがる。

以上のようにしてあらわれた不安や葛藤・挫折の解決を青年がどのようにこころみるか，それが逸脱文化の形成にどのように作用するかを検討しなければならない。ただ，青年集団との関係を一言しておくならば，青年の葛藤・挫折の体験から逸脱的な青年の集団，そして逸脱的な文化の形成へとすすむという一本筋の図式によるだけでなく，局在的な青年集団が結成されていて，その結果が成人社会との葛藤をうみ，さらに逸脱へと変貌する過程もありうること[6]に注意したい。その辺の消息には，相互循環的な作用があろう。いずれにせよ，青年による不安定からの復元，成人社会との葛藤の解決の過程にあたり，既成規範のどれかに適合・順応（adapt）するような経路をとる多数者もあるが，少数の青年層は社会との不整合関係を発展させ，成人の支配する規範から逸脱をはかる。そのばあい，相対的なちがいではあるが，逸脱は二つの方向にわかれるうる。一つは成人の支配する価値秩序からの逃避を主とした方向とするばあいであり，もう一つは攻撃の機制がつよくあらわれ，社会に対決する「怒れる若者」の型であって，ともかくも青年なりの新文化・新価値をおしたて，既存の文化や成人層に挑戦する。前者は「脱体制」の方向にあり，後者は「反体制」の方向であ

6) Turner, R.H.: op. cit.

る。小論では前者を青年の「脱出文化」とし，後者を「反抗文化」と仮称し，ともに青年逸脱文化の下位分類としておく。両者を区別するものは，青年エネルギーがむけられる力点の相違にあるのであって，脱出型は既存文化の否定・拒否に力点がかかり，反抗型の方は否定だけでなく，対抗的な変革・建設に力点がかかる。したがって，対社会の客観的な機能の点になると，両者にかなりのひらきがあらわれる。しかし，両者はその発生の経過の点と総体社会と葛藤関係にあるという点では同根であり，逸脱文化として一括することができる。さきにのべたイーンジャーのように，これを反文化とするものもあるし，欧米やわが国の一部で対抗文化（Counter-culture）とよぶこともある。

「脱出型」の青年文化は，現代の社会生活条件のもとで青年が経験する不安定や挫折に対する補償ないし逃避の機制にもとづいて形成され，成人の支配する文化体系への嫌悪や不信とともに，自己無力感や課題不感症，さらに対決への断念がひそむ。第二次大戦後の青年についてしばしば観察されてきた諸特性のおおく――たとえば，無責任さ，刹那主義的快楽主義への傾斜，理念イデオロギーへの同調のよわさ，ステロタイプへの猜疑心，うつり気，一時性志向などを一括してとらえてみると，脱出型青年文化の心理面のパターンとして理解される。また，NHK放送世論調査所が，1966年から1971年までにおこなわれた全国規模の各種世論調査データを収集分析した結果[7]，青年世代が成人世代とのあいだにギャップをしめした諸項目が多々検出されるなかで，たとえば社会・政治意識の分野では，青年における「現状否認」の意識が深化する一方で，「社会関与」の意識が沈滞し，不活性化しつつあることがあきらかにされ，青年における脱出志向が看取された。さらに，中等教育在籍中の十代青年の小集団が学校生活に対する「ウラ文化」として表現している態度には，集団的自律の反面において，強制的・一律的な学校の管理から逃避し，現代社会の価値体現者としての成人の無味乾燥を批判しつつも，成人責任への移行をなるべく長びかせ，いわてる気ままな青春の享楽に中心的な価値をおく傾向が濃厚である。一般に，脱出型の青年逸脱文化の形成を生活内容面でとらえてみるとき，服装・娯楽・スポーツ・性愛・非行・暴力などのような外面的・閑暇的・消費的・感性的な分野に定着するばあいがおおい。そのもっとも洗練されたものは脱俗の遊芸に達するばあいがあるし，もっとも虚無なるものは，事柄をとわず，暴力・抵抗・破壊自体が目的化した「無方向の拒絶反応」という定型もある。これらの様相の差にもかかわらず，行為の底にある共通な心理は，不安定や挫折にたえながら原因となる現実条件にたちむかうことをせず，抑圧を排除することによって解決をはかることを断念する他方で，成人規範のいかなるものも採用しないところの無方向の彷徨をはじめたり，あるいは，成人支配の価値体系のうちで瑣末・末梢の類に属することにエネルギーを集中する傾向で

7) 児島和人・秋山登代子：世代ギャップの構造，NHK放送文化研究所，文研年報 No. 17, 1972, pp. 42—46.

ある。

かような脱出型の青年文化がどのような機能を客観的にしめすかということは，青年の脱出エネルギーの様態がさまざまであるところから，簡単には評価できないが，一般的にいって，前第7節の青年局在文化のばあいに似ているとおもわれる。すなわち，その社会に対する衝撃力は漠然として不明確であり，直接には脅威となることはおおくはない。なぜならば，脱出文化の中核的価値をなすところの「からの自由」とか「脱体制」とは，文字どうり，既存の価値からの訣別であるけれども，すすむべき方向の解答を準備していない。ヒッピーも，ファッションも，スポーツも，あそびも，ただそれだけであって，社会の表層に浮遊するだけという次第である。消費やレジャーは，T.パーソンズのいうように，欲求不満のはけ口として，特定社会体制の安定に寄与する効果にとどまることもある。非行などはたしかに社会秩序に動揺をもたらすけれども，逆に既存体制の統制作用をつよめ，支配的な価値体系の補修と強化の努力を喚起することもおおい。

青年個人の人生行路に対しては，脱出型文化への参加は屈折した影響をのこす。局在文化のばあいと同様に，歴史的社会からの絶対的な脱出は不可能なのであるから，青年の年齢がすすみ，成人としての妥協や適応ができはじめると，早晩きえうせることがおおいのであって，かようなばあいは「泡沫文化」と評価される。ここでいう泡沫とは，持続発展によって客観的な効果をひきおこすことのない一過性の作用をさす。

アウトプットの面では，上記のように微弱にみえる青年脱出文化であるけれども，それが社会的な規模をもって現代に出現したことの意義には，微妙かつ重大なものがある。第一に，青年が歴史的な社会とかかわりあわずに「あそび」におけるような感覚や官能の次元に逃避しているということは，青年がもともと主体性・自己確認やエネルギーの発現をもとめながらも，余暇的・消費的分野でしか実現できないでいるということである。それはまた，社会が手ごたえのある生活場面を青年に対して準備しそこなっていることになる。第二に，脱出型においては，青年のがわになんらかの程度の「あまえ」がある。たとえば，R.ターナー[8]が指摘しているように，特に十代の青年にみられることとして，かれらが脱出的な逸脱行動にでるばあい，あまりぎりぎりまで暴走しすぎないうちに，いずれ両親がひきとめてくれるだろうという暗黙の予想がもたれている。出家遁世はともかくとして，真実の脱出の行手には乞食放浪か野たれ死がまっているものである。だから，現代の脱出型逸脱のおおくは，ゆたかな経済社会の余剰生産を前提とし，結局それに依存しているところの片隅の自由であり，にげ場をそなえた拒否行為といえよう。疎外からの解放ににているが，疎外の再生産という面も否定できない。

8) Turner, R.H.: op. cit. p. 144.

第三に脱出文化は，ひとつには青年の力量不足にもとづく反動形成であるけれども，より基本的な病因は社会における人間疎外にある。労働と余暇活動の相補両立関係の本質がくずれ，労働における疎外が進行するときに，たとえば勤労青少年には余暇価値中心思想があらわれる。そういう意味で脱出文化は，社会に対する直接の効果という機能の点で微力であっても，社会の文化の総体に関して問題提起をおこない，みずからの症候によって全身の機能障害について警報を発しているという意義があり，重視さるべきである。第四は，むしろ機能論の問題であるが，それは単に問題提起や警報の意義があるだけでなく，広範に普及し，社会に蓄積・濃縮されていくときに，既存の価値体系を震駭させ，単なる脱体制であっても，体制規範を空洞化させ，さらには体制変革の土壌を準備するという漠然とした可能性をはらんでいる。

如上の脱出型青年文化は既存価値の拒否，成人統制からの逃避によって，消極的に異議申したてをおこなっているのであった。現代青年が不服従や反乱を脱出型によって表現したとしても，それは代案や解答をもたない問題指摘であったから，いずれ泡沫化をたどる公算がおおきいのであるが，他方では，壁一重のところで，積極的な変革エネルギーへと転じる可能性をもひめている。青年が既存の価値の拒絶にとどまることなく，さらに一歩すすんでそれを排棄し，あるいは破壊して，かれらの欲する別な新価値を代置しようとするとき，「反抗型」の青年逸脱文化が姿をあらわす。

反抗型青年文化の発生は，一言にしていえば，不満や挫折に対する青年の反発エネルギーが強烈であることにもとずくし，そのような攻撃性は現代社会の急性変動という状況に条件づけられている。ふるくはM. ミードがいったように，また第二次大戦中にK. マンハイム（Mannheim）がいったように[9]，青年は天性的に理想家や反逆者・革新主義者であるのではない。比較文化的な資料をあさるとき，青年が温和・従順であり，あるいは頑固な保守主義者であるばあいをすくなからず発見できる。それにくらべて，現代社会の青年に，既存価値への攻撃姿勢があらわれるのは，つぎの理由による。第一に急性変動によって，社会における権威の力がゆるみ，正統と異端との識別を指図する勢力がうすれ，青年の自由を拘束するものがすくなくなる。第二に，第7節「青年局在文化」でのべたように，社会のなかに遊離性の青年集団ができ，そこに身がるさと自立性が発達する。

第三は，青年の社会理想に関することである。R. リントン（Linton）のいうように，どんな文化にも現実面（Reality）[10]と理想面（Ideality）とが一緒にふくまれているのであるが，これらに対して青年と成人とのあいだには，対応のしかたに相違がみられる。そのことを

9) Mannheim, K.: Diagnosis of our Time, Routledge & Kegan Paul, 1943, pp. 31–53.
10) Linton, R.: The Cultural Background of Personality, Routledge & Kagan Paul, 1947, pp. 28–35.

K. デーヴィス(Davis) は親子葛藤の研究[11]において検討し，成人は現実処理の有効性とか，多数者に受容されるという点で理想を採用するが，青年のばあいは，現実の重味に対する無関心と，一貫性論理への執着とから，理想をたてまえ (official culture) レベルでうけとる。そこで，青年は方法上の短絡があろうとなかろうと，理想の直截な実現をはかるか，もしくは，理想と現実のギャップに我慢しかねて，現行の理想に反逆をくわだてることになる。第四に変動期における当然のこととして，社会体制内には反体制的な勢力が発生するものであるが，伝統的な価値の内面化がそれほどすすんでいない青年世代は，ただそれだけの条件によっても，反体制価値に接近しやすい。

このような社会心理的機制によって，今世紀初頭以来，まず欧米における反抗型の青年逸脱文化が台頭し，第一次大戦をへて第二次大戦後にいたるや，あたかも青年反乱の季節を呈している。ヌーベル・バーグの芸術運動，イデオロギー的学生運動のような創造的変革を志向する反体制のものが典型である。そのほか，理想主義の社会的現実化をめぐる諸種の青年運動の発想と実践は，すべてこのパターンにいれてよいであろう。第一次大戦前のドイツのヴィネケン（第2節参照）がつかいだした Jugend Kultur の概念は，ここにのべる反抗文化と一脈通じるものがあろう。この型のにない手たる青年は決して多数ではない。逸脱者はつねに少数であり，また変革勢力は当初つねに少数の逸脱者である。また，ここにのべた反抗型とさきにあげた脱出型とは，分析概念ないし理念型としては区別できても現実の青年集団の文化についてはそれほどはっきりとした線がひけるものではない。脱出志向としてうごきだしたものが，いつのまにか反抗型の革新運動に成長したり，逆に，反抗型としていきおいのよかった青年運動が，停滞や挫折をへたのちに，脱出型へと変身するばあいもすくなくない。

つぎに反抗型の青年逸脱文化は対社会的にどのような機能をはたしうるのであろうか。これは解答困難な問である。われわれの判読しうる青年近代史資料はいまだに未整理であるし，現在進行中の事例に関しては，未来の可能性をうらなうことになるからである。ただここでたしかなことは，青年たち独自の力で，社会体制や価値体系をゆさぶりだしたということである。告発者としての青年層勢力はもはや無視することはできない。ここで，みじかい過去の資料と現在進行中の反抗型青年文化の形成過程から推論して，その社会的な効果を評価してみると，第一に，青年による芸術創作分野での逸脱性は，未来の文化を制圧したり，すくなくとも優勢な芸術文化へと発展する可能性がもっとも有望な分野である。およそ感性とその様式の世界は相対性・多様性の許容範囲がひろく，倫理や政治体制のような統制機構とは縁どおいからである。また青年自身も，ゆたかでするどい感受性と表現力で時期にあ

11) Davis, K.: The Sociology of Parent-Youth Conflict, American Sociological Review, Vol. 5, No. 4 (August 1940), pp. 526–529.

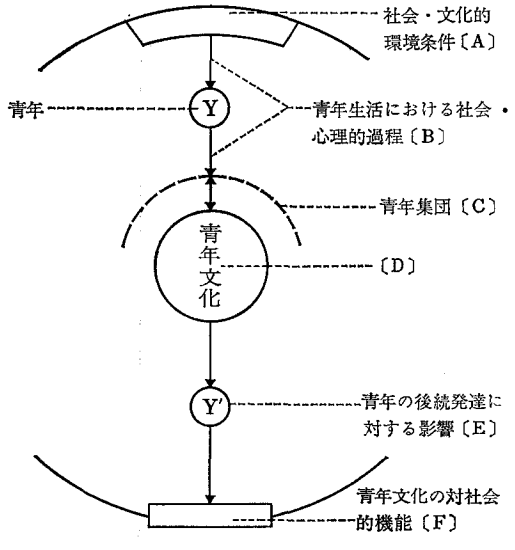
り，その直観と創造力のゆえに伝統的な生活様式を拒否し，新しい感覚と表現をおしひろげてゆくことができる。

芸術という限定された分野の可能性にくらべて，それ以外の反抗型文化のばあいはどうであろうか。おおくは社会運動・精神運動の分野のものであるが，一応直接的効果と関接的影響とがかんがえられる。そのばあい，直接的には，青年が提出している逸脱文化型が，その延長線上に拡大普及し，旧価値を制圧するならば，まさに革新の成就ということになるが，そのようなことはほとんど可能性がないようにおもわれる。特に青年のみの力と思想による政治・経済体制への致命的な直撃はもっとも困難であろう。それは，社会大衆のなかにおける青年の位置と力量の軽さのゆえであり，さらにまた経済や政治は社会体制における中核的な部分であって，それを把持する支配層が存在するかぎり，その質量はまさに巨大だからである。つぎに，間接的な機能は波及効果と称すべきものであるが，青年勢力が容易に頓坐消滅するばあいは別として，間接的には，ときに甚大な結果をもたらしうる。特に伝統的文化や旧規範に機能不全が進行しているばあい，青年による告発・問題提起と革新ビジョン唱導があるとき，それが機縁となって旧体制はおおいに動揺をおこし，さらに青年以外の勢力（成人の反体制勢力）の運動を発火させる。それは，逸脱的な青年単独というよりも，他の社会的要因と結合して，特定効果に到達するばあいであって，現代史におおくみられるのはかようなケースである。一言にしていえば，青年運動は変革発起の機能において有力とみなしうるが，効果の実現は別種の社会力学によると評価すべきであろう。反抗型青年文化の社会的滲透がありうるとすれば，それは屈折した経過によるし，複合的な合力の結果でもある。

以上，現代の青年性を新奇で特異なものに映じさせる根拠であるところの，青年逸脱文化について考察してきた。そこで下位タイプとしてあらわれた脱出と反抗の二型のほかに，前第7節での局在文化をふくめて，今日の青年文化は様相の多様さもさることながら，作用の面でも一様でないことを指摘した。そこに，われわれは「複数の青春」をみる。要は多元的変動社会において，価値体系や役割体系が崩壊し，変容する不安定状況において，生きようとする青年のエネルギー表現である。青年文化の，青年個人の人生および社会総体に対するインパクトは，炯眼をもって調査され，洞察力をもって理論づけられなければならないが，究極は，これからの歴史が判定するところである。かりに，なげきおそれることなく，また，望みを託しすぎることもなく，青年の逸脱文化を評定するならば，廃頽と建設，逃避と前進，泡沫と創造の両方向を二重うつしに看取できるのではなかろうか。青年のエネルギーの行先を卜するものとしては，青年自身や客観的未来状況だけでなく，青年とかかりあう成人の誠実な応対が重大な意味をもつことはたしかである。

最後に，この試論において筆者がもっとも中心となる事項として重きをおいた部分を再言

要約することによって結びとしたい。それは社会状況への反応パターンとして青年期特性をとらえる視角であり，そのような青年性の社会的次元での表現がいわゆる青年文化なのであった。ところが，社会的事実として措定された青年文化については，その現象記述もさることながら，青年文化のインプット（形成過程）とアウトプット（客観的効果）との全過程を構造的かつ動的にとらえるところの理論構成へと一歩すすめることが今日の青年研究における課題とおもわれる。そこで，まず第2節「青年文化論の台頭と課題」で要請し，第6・7・8節での青年文化各型の設定に適用したような「関連構造論」的モデルを発想したのであった。そのばあい，モデルにおける関連諸要因の配置を例示するならば次図のようにあらわすことができよう。



〔A・B・C・D・E・F〕	青年文化の関連構造
〔A・B・C・D〕	青年文化の形成過程
〔C・D〕	おおくのばあい，CはDの直接的な土壌であるが，相互作用的でもある。
〔D・E・F〕	青年文化の客観的機能。〔D・E〕は青年個人に対する，〔D・F〕は社会に対する側面。
〔Y→Y′〕	青年の発達過程
〔A→F〕	社会変動過程

如上の枠組を利用して現代青年文化を検討するとき，いくつかのパターンが分節できたのであり，第6・7・8節にのべたとおりである。それらをさらに一覧表にまとめて次ページにしめすことにする。なお，設定されたパターンは青年そのものの「分類」とは同一でないことに注意したい。青年の意識と行動の型（文化）に関する次元のものであって，むしろ理念型あるいは分析概念とみるべきである。どれかのパターンを濃厚に具現した青年群もあろうが，具体的な青年では，諸型の混淆や型相互間の流動・変容があらわれることがおおいであろう。

現代社会状況への反応パターンとしての青年文化

	D 青年文化の型	A 社会・文化的環境条件	B 青年期生活における社会心理的過程	C 青年集団	E 青年の後続発達に対する影響	F 青年期特性の対社会的機能
伝統的・普遍的	役割型 期待される青年像への適応。成人文化と相違しながらも整合性あり。	優勢な社会的勢力とその価値体系の存在。学業や労働における業績主義。青年へわりあてる外因的な役割期待。	期待される役割への適応。役割取得学習。潜在的な緊張の抑制あり。ときに強迫的。	成人による直接管理あるいは間接統御された制度的集団。教育社会や企業組織など。	基本的体制持続の範囲で適応性保持。世代交代は一応円滑。通過文化としての形成的意義。	保守的で順体制。現体制の枠組の維持・発展に貢献。
いちじるしく近代社会的	局在型 大衆社会のなかに浮遊する自閉的な独自性。いわゆる若者文化の発生。余暇的・感性的・消費的。	急性社会変動・社会解体による基礎集団の社会化力減退。制度的集団における青年の疎外。青年の発達を誘導する社会的装置の機能不全。成人層との共存協働から離脱する機会の増大。	不安定解消のカタルシス機制。成人の触手を忌避。無責任とロマンティシズムによるエネルギー表現。ただし脱出志向は曖昧。	遊離した自閉的局在集団。インフォーマル。「ウラ」集団。同調性の傾向。	第一次集団から第二次集団への中継ステップ，あるいは中間クッション，または一過性の泡沫効果。	全体社会をおびやかさない程度に許容・温存される不活性。放置される。あるいは緊張緩和の安全弁として機能。
脱型	逃 脱出型 意図的な脱体制。既存価値「から」の逃避。あそび志向。社会的不関与。		成人世代との接触・共存の場面における挫折・欲求不満。補償・逃避の機制。現体制否認と無方向。	インフォーマルな自生グループ。	成人化へのモラトリアム。早晩の妥協か野たれ死。反抗型へ転化する逆襲の可能性あり。	消極的な異議申し立て。社会文化への動揺をもたらさない程度ならば，柔構造体制の安全弁として放置される。
脱型	反抗型 反体制。怒れる若者。旧価値の破壊のみならず，新文化の創造を志向。		既存価値への反撥エネルギー大。攻撃と創造による自己確認の志向が明確。	モラールのたかい自発的集団。ときに運動体として組織化。	前進と挫折，創造と空転など屈折した進路。二重うつしの青春。	対社会的インパクトは最強。芸術分野がもっとも有効。一般には青年世代のみによる直接の変革惹起はむずかしく，むしろ間接の波及効果の方面が評価される。

YOUTH CULTURE : AN INTRODUCTION TO THE SOCIOLOGY OF YOUTH

TAKAMI NINOSEKI

In modern industrialized societies the young generation seem to have revealed themselves as a new species, with their peculiar manners, fashions, values, and patterns of behaviour producing an unprecedentedly wide gap between themselves and the adult generation. This is evoking serious concern not only in the practical worlds of education and of social administration, but also in such academic fields as sociology. The emergence of a new type of youth really reveals a problematic symptom that arises from the basic character of modern culture and society. The aim of this paper, focusing attention on so-called 'youth culture', is to try to construct theoretical frameworks for the sociological approach to youth problems.

The full text resolves itself into three parts. The first part (Section 1–3) deals with the socio-cultural conditions that stimulate the study of adolescence and youth in modern societies, and reviews the emergence and development of concepts and theories concerning youth culture. It then proposes various problems to be examined in the methodology of youth research.

The second part (Section 4–5) digresses somewhat from the main theme and makes sociological elaborations about the 'adolescent period' and the 'youth stage', with the intention of establishing a premise for the concept of youth culture. It is argued that age is as basic a category as sex in differentiating composite members of a society, and is not only defined by the time lapse of life or by the degree of physiological growth, but is also a role which can be culturally defined. Moreover, it is maintained that the period of youth is secondary and derivative in the age-grade-system, though its origin goes back to remote antiquity when there arose a discrepancy in development between physical and socio-cultural maturing. The writer tries to demonstrate the emergence and evolution of the youth period in human society.

Part three (Section 6–8) is the main body of the paper. Here, the intention is not to describe the modes of youth culture but rather to propose an explanatory patterning of youth culture in terms of 'in-put' and 'out-put'.

Some of the propositions critically presented with regard to the methodology of studying youth culture are as follows; (1) One of the controversies about youth culture is a question as to whether it is a myth or reality. This kind of question is a matter of taxonomy or semantic definition, that is, elementary for scientific observation, and usually attributable to ambiguity or difference of definitions. An operational definition is given whereby it is taken to pattern of behaviour and consciousness common to and peculiar to youth. (2) Nowadays there is little empirical data to substantiate talks and theories concerning youth culture. First of all, any youth culture is required to be detectable by a significant difference of percentage

distribution of a particular trait between youths and adults. (3) Overt and expressive traits such as manners, fashions, and language, etc., are liable to draw public attention. However, that which characterizes and emphasizes 'culture' is such covert and implicit factors as values and norms. It should be remembered that overt and covert behaviour are not always relevant. (4) In fact, the concept of youth culture was evolved as a result of the emergence of deviant patterns of youth behaviour in modern society. However, discontinuity and gaps between youths and adults are not limited to modern society. It is therefore desirable for sociologists to take a wider perspective, comparing current youth culture with that of different societies, past and contemporary.

The most significant and rewarding task in the study of youth culture is to develop a comprehensive theory covering both its in-put and out-put, that is, psycho-sociological explanation of how a youth culture is formed, and of its outcome and function for youth and society. Having analyzed current youth culture with the above-mentioned theoretical framework, three types are differentiated;

The first type, "youth role culture" is of traditional and universal character. In a society that has a stable social order there is a age-role-system which consists of specific roles clearly defined for each age-grade, and youth's role is distinctly established as a part of that system. Young people, in their developmental process of adjusting themselves to society, take and learn the role ascribed for them, coming in effect to share the common pattern of youthfulness as would be expected in that specific society. Therefore, "youth role culture" has the educational significance of operating as a step in learning or in the passage through life-career, and assuring the socialization of the young. Youth role is, so far as it is called 'youth culture', discontinuous with and different from the adult role, but not deviant. It is in harmony with the whole role system of the society. Thus its social function is basically conservative, contributing towards the reservation of the status quo and securing social stability. Though it was typical and prevailing in pre-modern societies, modern society has created its own youth role culture. For example, we have achievement-oriented student culture.

The second type, that is to be called "local or isolated youth culture", is a product of modern industrial society. It is formed on the basis of an informal peer group, which is isolated from the larger society, separated from the adult generation, with neither control by nor interference by adult, its members behaving with freedom and spontaneity. Local peer groups and isolated youth culture are caused by acute social change and disorganization on the one hand, and the rise of gigantic, bureaucratic social organizations and of vast mass society on the other. Modern society, with its complicated and uncoordinating organizations fails both to allocate stable status to youth and to contribute towards a smooth path through life. Thus youths in insecure situations are obliged to defend themselves by endeavouring to secure their identity in the form of isolated youth culture. This culture, created by youths for themselves, is inclined to be of emotional and ritualistic nature because of its fundamental compensatory mechanism. So, it is difficult to estimate whether or not its influence is beneficial towards the later development

of the youth. It may make a favourable contribution to the succeeding socialization of youth or may be no more than a transient experience, rather like a bubble floating on the surface of life. As for social function, it does not seem to have any impact on society, is apt to be left as it is, and is allowed to exist in some part of society as one of its pluralistic values. The significance of isolated youth culture consists in the fact that it reveals, at an early stage, a weak-point in the adult-youth relationship in modern society.

The third type named "deviant youth culture," has emerged since the beginning of the 20th Century, especially after the First World War. It shares the socio-cultural background and the peer group characteristic with the 2nd type, isolated youth culture. However, it differs from the latter in its aggressive, repulsive energy. The young man or youth peer group, while coming into contact with the adult world, experiences frustration, anxiety, or role-ambiguity, which leads to a deviant pattern of solution. In that case, the course of deviancy takes two directions; one takes the form of mere rejection or escape from adult values, the other that of protest or rebellion. As for the influence of deviant culture on youth, "escape" type means simply a moratorium of adulthood and involves the youth coming to a form of compromise with reality sooner or later. "Rebellion" type involves the youth taking a zigzag, meandering course. Both construction and destruction, progression and regression, purification and decay are to be encountered in the future of the youth. As for the effects on society, the escape type of deviant youth culture signifies negative objection to the status quo and has an indirect impact on society, but usually works as safety valve to soften the implicit tension of youth. On the other hand, youth culture of rebellion type exerts the strongest impact upon social order. However, it is difficult for the youth alone to bring about the result of social reconstruction themselves. Youth's rebellion should be considered in terms of its institutive and expansive effects of social change.